
暗闇からのキボウの歌

すかぶ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暗闇からのキボウの歌

【NZコード】

NZ829Y

【作者名】

すかぶ

【あらすじ】

あやさきじゅうき
綾崎紅騎

綾崎紅騎は突然トラックにはねられて死んだ。

死んだはずの紅騎が目覚めた世界は死語の世界だった。

紅騎はある人物の思い出だけ欠けていた。それも大事な人の記憶だった・・・

大人気アニメAngel Beats!の二次創作小説となっています。

岩沢×オリ主とベッタベタですが、楽しんでいただけたらうれしいです。

(注) かなり原作とは違いますのでそのままお許しください。

無力

「一枚、一枚……」

俺はいま万札を数えている。

「・・・よし、ちゃんと三十万あるな」

なぜかつて？それは今日はアイツの誕生日だからな。

アイツはギターをやっている。

腕はかなりの物で時々俺と弾き合ったりもする。

かくいう俺もギターに没頭している人間の一人だ。

俺もアイツもバンドを組んでないので周りからは不思議な目で見られることがある。別に気にしてないしバンドにも興味ない。

アイツもあまりバンドには興味ないらしい。そんなんだから通じ合つところもあつたのだろう。

俺とアイツは普通に恋をして付き合つて普通の恋人同士のような毎日を送るはずだった。

・・・けれどアイツは三日前に死んでしまった。原因是脳梗塞だそうだ。

アイツが脳梗塞で倒れて死ぬまで一ヶ月もあつたのに見舞いの一つも行つてやれなかつた。

俺の少ない人間関係じゃ三日前にアイツが死んだことを知るのが精一杯だつた。

だから俺は、アイツが気になると言つていたギターを買ってやろうと決心した。

『お前、何か欲しいも乗つてあるか？』

『ううーん・・・特には』

『そう言つなつて、一つくらいあんだろ？』

『・・・私は・・・お前が側にいてくれれば何もいらない・・・』

『え？今なんて言つた？？』

『な、何でもない！あ！あれだ！前紅騎と一緒に見に行つたギター

！』

『ああ・・・あれか、けどかなり高かつたぞ・・・俺たちには手の届かないくらい・・・』

『・・・だから何も無いつていつたじやないか』

『ん・・・そつかあ』

せめてもの償いに・・・

「すみません・・・・」

俺は急いでアイツが眠っている墓へ向かつた。

アイツの両親は連絡をしても身元の引き取りを拒否したらしい。

だからアイツは死んだ病院の近くの墓に埋葬された。立ち会つたのは担当の医者だけ。

俺は許せなかつたアイツを見捨てた両親を、アイツの夢をいとも簡単に切り捨てた神様を。

最後まで何もしてやれなかつた自分自身を。

俺は無我夢中で走つた。一秒でも早くアイツに会いたかつた。

キイイイイイ

「・・・え？」「

雨が降つて濡れた路面。

霧によつて悪くなつた視界。

酒に酔つた運転手。

「・・・岩・・・沢

ぐしゃあ・・・

俺は何の抵抗も出来ずにトラックの下敷きになつた。

無力（後書き）

少しずつ、確実に更新していきたいと思します。
応援よろしくお願いします。

死後の世界（前書き）

楽しんでいってください

死後の世界

「・・・はつ！」

「ここはどこだらう？」

確か俺は・・・トライックの下敷きになつて・・・

俺は死んだのか・・・

「じゃあアイツもいるのか

・・・アイツ？アイツって誰だ？そもそも俺はなんでトライックの下

敷きに？

「・・・くつ、思い出せない」

「何が思い出せないのかしら？」

振り返ると3メートルほど先に銀髪の少女が立つていた。

「・・・だれ？」

「名前を聞く前にそちらから召乗つたらどうへ？」

それもそうか・・・

「俺は綾崎紅騎。^{あやさきこうき}ここなんだ？俺は生きてるのか？」

少女は無表情で答えた。

「ここは死後の世界。あなたはもう死んでいるわ」

やつぱり俺は死んだのか。でも本当に死んでるのか？脚はちゃんと生えてるし心臓も動いている。

「教えてくれ、俺は本当に死んだのか？」

少女の口元がかすかに動いた。

「hand sonic」

少女の腕から刀身が形成され少女がかがんだと思つと、いつの間にか距離がゼロになつっていた。

「教えてあげる」

ドシユツ

「ぐ・・・はあ・・・」

心臓を貫かれた。

一気に視界が狭まり後はただ暗闇だけが広がつていった。
「つたく・・・なにやつてんのよコイツは」
そんな声を聞いた気がした。

死後の世界（後書き）

忠実なようなそういうぢやないような……
曖昧ですみません……

戦線前線基地（前書き）

「Jリーグは結構忠実になつてゐると思ひます。
それではどうぞ！」

戦線前線基地

「ん～・・・まぶし・・・」

田元に強い日差しを感じて俺は田を覚ました。

二つ並んだ白いベッド、独特の消毒の臭い、ここは保健室か。

「・・・そうだ、俺は心臓を刺されて・・・」

刺されたあたりのところを触つてみると傷一つ着いてない。本当は刺されていないと思つたが制服にくつきりと刃物で刺したような穴が開いていた。

「いつたい何だつたんだ・・・」

「あ、気がついたみたいね」

一瞬警戒したが昨夜の少女じゃなくて少しほほとした。

「だれだ？ アンタは・・・」

紫の髪と田立つリボンが印象的な女の子だった。

「俺は綾崎紅騎、アンタがここまで運んできたのか？」

「わたしはゆり。そう、わたしが運んだわ」

だとすると見かけによらずかなり力があるみたいだ。

「そうちか・・・それはありがとうな」

「ありがとうついでに頼みがあるんだけど・・・」

ゆりがこちらに顔をぐつと近づけてきた。

「紅騎、あなた戦線に入らない？」

「せ、戦線？」

彼女はかなりの近距離で話していることに気がついているのか？

「そう、死んでたまるか戦線。まあこじじゃなんだし基地に来なさい！」

この様子じゃ気づいてないようだ。

「基地？ そんな物があるのか？」

「つべこべ言わず着いてきなさい！」

強引にベッドから引きずり下ろされ俺は西部劇の引きずり回しのよ

うに連れて行かれた。

前線基地、校長室に着いたときにはとても悲惨な姿になっていたのは言つまでもない。

「川

・・・川?

そう言つてゆりは校長室の扉を開けた。

「みんな新しいメンバーを連れてきたわよ」

中には女が一人と男が三人（内一人はソファで氣絶している）がいた。

「お～ゆりっぺ、また連れてきたのか？・・・おおっ、一回連続で

穴あき学ランとは

「まあ、そう言わないの日向君」

青い髪の男、日向は俺に手を差し出してきた。

「俺は日向、まあ仲良く行こうぜ」

「ああ、じつらこそようじく」

俺も日向の手を握った。

「んん・・・ここはどうだ？」

さつきまでソファの上で氣絶した男が起きたらしい。

「お、そっちの奴も起きたみたいだぞ」

「ちょうど良いわアンタも戦線に入りなさい」

「戦線？」

男はだるそうな体を起こして聞き返してきた。

「そう、死んでたまるか戦線。ん～なんかしつくつしないわね～」

「じゃあこんなのはどうだ？走馬燈戦線」

「それ死ぬ寸前じゃない！」

「じゃあ死にものぐるい戦線

「必死過ぎじやない！」

「四面楚歌戦線」

「死なすわよ！」

「ど～と日向の意見は没になつていく見てて痛々しいほどだ」。

「じゃ、じゃあここは新入りに聞いてみよつぜまづ紅騎から…」

いきなり俺に降ってきた。

「お、俺？」

「どうなのよ？」

ギンと睨まれた。おおこええ・・・

「ゆりつペ戦線

「殺す！」

ひいいー！

「お、落ち着け！じゃあ今度はお前！」

わつをまでぼーっとしてたもう一人の新人？が面倒くせうつに答えた。

「勝手にやつてる戦線

するどずっと黙り込んでいたばかでかい斧を担いだ男がつかつかつてきた。

「貴様、ゆりつペに生意氣な口を…むつ一回切り刻んでやろうか！？」

随分短気な男だな・・・

「勝手にやつてるって言つてんだる！俺にかまうなよ！おれはすぐには消えるんだよ！」

おお、「イツもかなりの短気だ。

「消える？・・・まあ運良く来世で人間になれたらいでしょうね」「どうこう意味だよ」

ゆりは小さくやりと笑うと続けた。

「ちよつど良いわ紅騎、あなたも聞いてなさい。」

「お、おう・・・

すると周りが暗くなりスクリーンが降ってきた。

「二人とも分かつてているだろ？ここは死んだ者が集まる世界よ。現世と来世の中間と言つたところかしら。ここで消えてしまつと来世は人間以外のものに魂が転成するかもしれないのよ

タイミング良くスクリーンに様々な動物の画像が流れる。全部節足動物系なのはあえて黙つておこう。

「そこでわたしたちは戦うことにしてこの世界を手に入れられるよ！」

今度は節足動物から一人の少女の映像に切り替わった。

無表情で金色の瞳、透き通るような肌輝かんばかりの銀髪。

昨夜俺の心臓を貫いた張本人だ。

隣の新入り一号（仮名）も同じような表情をしている。

「これが私達の敵”天使”よ。こいつを倒してこの世界を手に入れるの！」

スクリーンが戻され部屋が明るくなつた。

「改めて聞くわ戦線に入ってくれない？」

最初に口を開いたのは新入り一号（仮名）だった。

「少し考え方をさせてくれるか？」

「いいけど、この部屋以外でね。」

どういう意味だろう・・・新入り一号（仮名）は悔しそうな顔を浮かべているが。

「分かつた。合い言葉は？」

観念したように了承した。

「紅騎、あなたもよ」

俺か・・・まあ、行く当てもないし断る特別な理由もないし。

「俺も入るよ、死んだ世界戦線に」

「いいわね、その死んだ世界戦線つて。よし採用！」

ゆりはぐつと親指を突き出した。

片思いな再会（前書き）

ここからぐつとオリジナル臭が漂ってきます。

片思いな再会

「それじゃここにいるメンバーだけでも紹介するわね。彼は日向君。その横が野田君バカつぽいけどバカよ」

日向が苦笑する。野田の方は別に気にした様子は見せていない。

「その隅っこにいるのが椎名さんで、そっちにいるのが岩沢さん、

彼女は陽動班のリーダーなの」

岩沢だつたつけ?がこちらをじっと見つめてきた。俺の顔に何か着いているかな?

「そしてわたしがゆり、戦線のリーダーよ」

「俺は綾崎紅騎だ。」

「俺は・・・音・・・無・・・?」

「音無か・・・記憶がないパターンはさほど珍しくない。まあ時期に思い出すぞ。」

日向が音無の肩をぽんと叩いた。

「じゃあ、音無君はわたし達と実際に行動する方に入つてもううわ。綾崎君は岩沢さんの陽動班に入つて」

「ん?俺が陽動班?なんで?」

「だつてさつきから岩沢さん綾崎君の方をずっと見てるんだもの。岩沢さん、気に入ったの?」

岩沢さんは黙つて俺の方に近づいてきた。

「綾崎・・・紅騎・・・なのか・・・」

「そ、そ、うだけど・・・岩沢さんだつけ?俺の顔に何か着いてる?」
その瞬間岩沢さんは驚いたような表情を見せ、うつむいたかと思いつ切り俺に平手打ちをしてきた。

バシン!!

「・・・馬鹿!..」

そう叫ぶと岩沢さんは校長室、もとい前線基地から飛び出していくた。

一瞬しか見えなかつたが岩沢さんは泣いていた。

「・・・あ～あ紅騎、初日から女を泣かせやがつて」

田向あきれたような顔をしていた。

「・・・浅はかなり」

ここにきて初めて椎名さんの声を聞いた気がする。

「・・・で、綾崎君、岩沢さんは生きていた世界からの知り合い

？」

俺が死後の世界に来てまだ一田もたつていない。それに岩沢さんは初対面だ。

つまり生前岩沢さんと会っていた事になるのだが・・・

「分からぬ・・・といつより思い出せないんだ・・・」

「何だ、お前も記憶がないパターンか？」

いや、生前のだいたいのことは覚えている。生まれたときから死ぬまで。

・・・けど何かが引っかかる。

「分からぬ・・・分からぬんだ・・・」

「それじゃあ今日は解散よ、綾崎君はちょっと残つて

「・・・・はい」

片思いな再会（後書き）

・・・まあ、いつなるのは必然的でしたね。
今後どう書いていくか楽しみです。

屋上（温室）

それでせんぐく

俺とゆりは学校の屋上にいる。あたりはあかね色に染まり、校庭では野球部がグラウンドの整備をしている。

「・・・まずは、あなたと岩沢さんの関係について教えてちょうだい」

やつぱりそのことか・・・

「そんなに気になるのか?」

「そりゃそうよ。いつもクールで我が道を進んでるって感じの岩沢さんが、あんなに感情的になるなんて。ちょっとした事件よ。そうだったのか。それなら聞きたがる理由も納得がいく。・・・だけど思い出せない。どうしても。

「さっき言ったとおり本当に分からんんだ」

「一つも?」

「ああ、だけど生前の記憶ははっきりしているんだ。どこで生まれたのかどうやって死んだのか」

「そう・・・じゃあどんな未練を残して死んだの?」

未練? 現世での未練か・・・

俺は思い出すとする。必死に、どんな些細なことでも逃さうとせずには。

すると激しい頭痛がしてきた、手足が震えて寒気がした。なぜか涙まで出てくる。悲しくなんか無いのに。

「『』、『』めん・・・無理に思い出させようとして・・・」

ゆりはポケットからハンカチを取り出した。ふけといつのだらう。

「いや、かまわない大丈夫だ」

俺はその手を少し乱暴に払った。

「・・・でも」

「少し一人してくれ・・・まだ死んだって実感できそうにないみたいだ」

俺は嘘をついた。もうとっくに死んだことは受け入れている。ただ同情をされて欲しくないだけだった。

「分かったわ・・・気が向いたら第二講義室に行ってみて」

「ああ、気が向いたらな」

ゆりは屋上を後にした。

・・・さて、どうするか。

田が暮れ始めているが、寮に帰るには少し早いみたいだ。

「第一講義室か・・・」

確かにそう言っていた。気が向いたら行ってみると。

やることもないし行つてみるか。

屋上（後書き）

今日はちょっと短めです。
次回をお楽しみに。

G i r l s D e a d M o n s t e r (前編)

それでいいんだ。

Girls Dead Monster

「第一講義室・・・は、ここか・・・」

多少迷いながらも何とかゆりに言われた教室に来ることが出来た。
「ゆりに道を聞いておけば良かった」

中では女の子四人が演奏をしていた。見た感じバンドのようだった。
かなり防音設備が良いのか少しの音しか漏れてこない。

「・・・さて、どうしたものか」

四人の中に見たことのある顔があつた。さつき思い切りビンタをか
ましてきた張本人岩沢さんだ。

「・・・とりあえず事情を話すか」

合つ度にビンタを食らつてはおれの顔が持たない。

ちょうど演奏が終わつたらしい、俺に気付いたらしくポーテール
のギターを持つた女の子が扉を開けてきた。

ガラ・・・

「さつきからいるようだけど何の用?」

「・・・気のせいだろうか。岩沢さん以外の三人から睨まれている氣
がするのだが・・・

「あ! 確か新しく戦線に入つた一人の内の一人ですよ
ドラマを叩いていた女の子が思い出したように話した。

「するとこの人が噂の岩沢さんを泣かせた人ですね!?」

「・・・・・・・」

すると、岩沢さんは無言で立ち上がりそのまま教室を出て行つた。

「あつ、どこに行くんだよ!」

俺は岩沢さんを追おうとしたが教室を出る前にガシッと両肩を掴ま
れクルツと後ろを向かされた。

真正面に獲物を捕まえた蛇のごく甘いギラギラさせた三人が並んでいた。

「さつて・・・詳しく聞かせてもらおうじゃなしシンイリクン」

終わった。絶対に死ぬよ。もう死んでいるが殺される・・・。

「・・・やれやれ」

俺が解放されたのはきつちり三人分殺された後だつた。

もちろんその後ちゃんと事情は話した。一部分の記憶が消えていると。

三人は一応納得してくれたが、またすぐに顔色を変えて俺を追い出した。

「だつたら早く誤解を解いてこい！」

だから俺は最初からやるよ」としていたんだって……

いまいちどこに何があるのか分からないので学校中を歩き回るしか

なか
た

あたりはすこかり日が暮れて人気も少ない。

「屋上か・・・」

俺はすぐに屋上へ向かつた。

屋上に続く階段を上つて扉を開けるとやつぱりいた。

岩沢さんはヘンヂの上でギターを弾いていた。

の音の集まりみたいだ。

「何しに来たの？」

矢張を抱かれた俺は戸惑いながらも隣の二つ目のベッドに

すると岩沢さんはギターを引く手を止めた。

「私は誤解なんてしていいない。お前は綾崎・・・紅騎、紅騎なんだ

「うう？」

やつぱり俺のことを知っているのか・・・俺の知らない記憶を・・・

「私だ！岩沢、岩沢まさみだ！」

立ち上がって必死に訴えるが俺は戸惑うだけだ。すまない気持ちでいっぱいになる。

「ちょっと落ち着いてくれ！岩沢さん！もう少し冷静になつて」

岩沢さんはハツと我に返つたような顔をしてベンチに腰を下ろした。

「・・・すまない。取り乱して」

二度三度深呼吸をしてようやく落ち着いたらしい。

俺は一つずつ確かめるように質問をした。

「岩沢さんは生前の記憶がはつきりしている？」

「クッ・・・ゆっくりとうなずいた。

「俺のことを見知っていた？」

「クッ・・・またうなずいた。

「じゃあ、俺がどう死んだのかは知ってるか？」

フルフル・・・今度は首を横に振った。

「こうことは岩沢さんが先にこの世界に来たって事か。
「いつ頃この世界に来たの？」

「一ヶ月前・・・

つて、この質問は重要じゃないか。

「今度は私から質問して良い？」

完全に落ち着いたらしく岩沢さんはじつとこちらを見た。

「どこで生まれたのか覚えている？」

俺ははつきりとうなずいた。

「アンタは生前何をしていた？」

これは覚えている。俺はちつちつライブハウスでバイトをしていた。

そしてギターもやっていた。

「ライブハウスでバイトをして・・・ギターをやっていた」

「誰ど？」

・・・誰と？俺はバンドをしていたのか？

いや、俺はバンドにはあまり興味が無かつたはずだ。
じゃあ、特定の誰かと一人でやつてしたことになる。

・・・ダメだ、思い出せない。

「・・・分からぬ」

「本当に思い出せない？」

「ああ・・・」

岩沢さんは妙にすつきりとした顔で笑った。とても悲しそうな笑顔
だった。

「そつか・・・特定の記憶だけが無いみたいだね。アンタも苦労だ
ね」

するとベンチから立ち上がりスツとこちらに手を差し出した。

「私がアンタの記憶を取り戻す手伝いをしてやるよ。その代わり私
達のバンドに入ってくれないか？」

交換条件か。悪くない。俺も生前はギタリストだったんだ。

「むしろこっちからお願いしたいよ。」

俺は岩沢さんの手を握った。思つてたよりもずっと小ちくて柔らか
い手だった。

「よひしく、岩沢さん」

「・・・よひしく、綾崎」

G i r l s D e a d M o n s t e r (後書き)

「これでようやく物語が一步進めました。
これからどうこう展開にしようかな・・・」

another view～岩沢～（前書き）

六話の岩沢視点です。

最初会ったときは驚いた。

しうがないだろ？ またあえるなんて思いもしなかったんだから。ここに来たつて事はアイツは死んだつてことだ。

アイツが死んだつて事実は残念だつたけどまた会えたうれしさの方が大きかった。

・・・だけどアイツが私と顔を合わせても表情一つ変えない。

まるで、赤の他人を見るような目だ。

記憶が無いつてパターンはここではよくある話だつたから。アイツもそれかなつて思った。

けどアイツは自分の名前をフルネームで言えた。記憶が無い奴独特の雰囲気は無い。

それじゃあなんで？ なんで私に気がつかないんだろう。

顔がよく見えないのかと思ってできるだけ視線を合わせてみる。アイツは私が見ていることに気がついたようだけど、不思議そうな顔をするだけだ。

しうがない、こっちから声をかけてみよう。

「・・・だつて岩沢さん、さつきからずっと綾崎君の方ばかり見てるんだもの。」

ちょうどゆりが私の仕草に気づいたみたいだ。私はそのタイミングでアイツに声をかけた。

「綾崎・・・紅騎・・・なのか？」

もつと氣の利いた言葉があるだろ？ が、こいつ言つのが精一杯だつた。少し緊張しながらアイツの言葉を待つた。

けどアイツは。

「岩沢さん・・・だつけ？ 僕の顔に何かついてる？」

その瞬間私の頭の中の何かがはじけた。

「・・・馬鹿！」

気がついたら私はアイツをひっぱたいていた。

悲しくて、悔しくて、やるせなくて、何が何だか分からなくなっていた。

私は部屋から出て行きバンドメンバーが待っている第一講義室に走つて行つた。

ガラガラガラ！

「・・・・・・」

「い、岩沢さん!? どうしたんですか?」

私は入江の言葉を無視して、ギターを持った。

私は無性に演奏したかった。音楽でこの気持ちを忘れたかった。

「・・・ちょっとね」

無理に笑つて見せた。後からひさ子に聞いたら思い切り目は泣いていたそうだ。

嫌なことは音楽で忘れる。これは私が生きていた頃から変わらないことだ。

・・・でもだめだった。どうしてもアイツの言葉がまとわりついてくる。

「ストップストップ！」

突然ひさ子が演奏を止めた。

「・・・・・？」

「岩沢、調子でも悪いの? 今田は全然集中できていけど」

「・・・・・」じめん

個人的な感情で演奏を止めるなんて最悪だ。リーダー失格だ・・・

「戦線のミーティングで何かあつたのか?」

すばり的中だつた。

「確かに新しく一人が戦線に入るんでしたつけ。もしかして前岩沢さんが言つていた生前の思い人が現れたとか! ?」

グッサア！

関根の鋭い一言でノックダウンしそうになつたが辛うじて踏みとどまる。

「これも後でひさ子に聞いたことだけど、そのときかなり挙動不審だったそうだ。

「も、もしかしてじ真ん中ストライクってやつですか？」

最後に入江からのどぎめの一撃。

私は近くにあつた椅子に座つて小さくつぶやいた。

「・・・そうだよ」

「それって、さつきから中を覗いてるあの男かい？」

ひさ子がドアの方をちらりと見る。

そこにはアイツがとまどつのような顔でこちらを見ていた。

「・・・」

「どうやらあたりみたいだね。・・・どれ」

ひさ子は早足で歩み寄つて扉を開けた。

ガラララ

「さつきから見ていたようだけど何か用？」

ひさ子は少し強めの口調で言った。

「あ、もしかして例の新人ですか？」

入江は気を遣つたようだけど全くフォローになつていない。

「つてことは、岩沢さんが前言つてた・・・」

私は教室を出て行つた。

途中でアイツの悲鳴が聞こえた気がするけど、どうでもよかつた。今はとにかく一人になりたかった。

「・・・さて、どうしようか」

何となく屋上に来てしまつたが気晴らしに何をしようか分からなかつた。

妙に首が重いと思つたら私はギターを持つたまま外に出たらしく仕方ない、何か歌うか。

さつき演奏していた曲から適当に選んで弾いてみる。

「・・・途中で自然に止まつてしまつた。

「・・・やっぱりはたいたのは悪かったかなあ」

右の手のひらを見てみる。何も変化はないがじんじんしている気が

する。

「いや、アイツが悪いんだ。私は悪くない！」
もう一度手のひらを見てみる。

・・・・・ けどやっぱりまずかつたかなあ。
キイ・・・

突然屋上の扉が開いた。誰かが来たみたいだ。
気配でだいたい分かるアイツだ。

「・・・何しに来たの？」

ギターをベンチに立てかけた。

アイツは私の隣のベンチに座った。

・・・いつもなら隣に座ってくれるのに。

「いやあ、岩沢さんが何か誤解しているみたいなんで」

アイツはまた他人行儀の口調で話してきた。

・・・いつもなら私のことなんか気にかけてないような話し方なのに。

駄目だ、やっぱり我慢できない。

「誤解なんてしていい！お前は、紅騎・・・綾崎紅騎なんだろう！？」

私は叫んでいた。とにかく気づいて欲しかった。

「私だ！岩沢まさみだ！」

もう、無我夢中だった。

「お、落ち着いて岩沢さん」

「あ・・・・」

そうだ、いくら私が叫んでも何も変わらないんだ。

「・・・すまない、取り乱して」

私はベンチに座った。何も考えられなかつた。

「岩沢さんは生前の記憶がはつきりしている？」

突然の質問だつたが話す気力はなく仕草だけで答えた。

コクツ・・・

「俺のことを見知っていた？」

「クツ・・・

「じゃあ、俺がどう死んだのは知ってるか？」

フルフル・・・

知っているはずがない。私の方が先に死んだんだから。つてことはアイツは自分自身がどうやって死んだのかは覚えているのか・・・

「いつ頃この世界に来たの？」

ようやくしゃべる気が戻ってきた。

「一ヶ月前・・・」

今度はこっちからも聞いてやるのじゃないか。

「今度は私から質問して良い？」

アイツははつきりうなずいた。

「アンタは、生前何をしていた？」

生前の記憶がはつきりしているなりすぐに答えられるはずだ。

「ライブハウスでバイトをして・・・ギターをやっていた」正解だ。じゃあ、覚えているんだな生きていたときのこと・・・

私は意を決して質問した。

お願い・・・

「誰と？」

するとアイツは苦悶するような顔をした。

お願い・・・

「・・・分からぬ」

お願い・・・思い出して・・・

「本当に思い出せない？」

なんで私の思い出だけ失つてるの？

「ああ・・・」

アイツは、本物ののアイツだった。

だけど、私の事を忘れたアイツはアイツじゃない。

「そつか・・・特定の記憶だけが無いみたいだね。」

だったら、思い出させてやる。どんなに時間がかかっても。どんな

に苦しくても。

・・・もし私が消えてしまつよつたことになつても。

「私がアンタの記憶を取り戻す手伝いをしてやるよ。その代わり私達のバンドに入ってくれないか?」

一瞬の一時だつたとしても私はアイツに呼んで欲しい。

「むしろこいつちからお願ひしたいよ」

私の事を岩沢じゃなくてまさみと呼んで欲しい。

あいつと握手をした。

懐かしい手の大きさと温もりだった。

「よゐしへ、岩沢さん」

せつしたら私も、綾崎じゃなくて紅騎って呼んでやる。

「・・・よゐしへ、綾崎」

another view～岩沢～（後書き）

明日から一日間諸事情により投稿しません。
よろしくお願いします。

G i r l s ? D e a d M o n s t e r (前書き)

— 田代ふりの投稿です。
それではどうぞ。

Girls? Dead Monster

「じゃあ、今日から私たちのバンドに入ることになった、綾崎紅騎だ」

翌日俺は正式にメンバーとして迎えられることになった。
意外にも全員俺が入ることに賛成してくれたらしい。一人くらいは
反対する奴がいると思ったのに。

「綾崎紅騎です、よろしく」

・・・訂正一人いた。昨日俺を率先的に、てゆーかヤツ一人だけで
三人分殺してきた女。確かひさ子って言つたけ?
が俺に思い切りガン飛ばしてきている。

・・・なんで?

「で、右からベースの関根。ドラムの入江。ギターのひさ子。」

「よろしくお願ひします!」

「・・・」

「ああ、よろしく」

うーん・・・と思い当たる節がないぞ。

むしろこっちの恨みの方が大きい気がする。

「で、綾崎先輩は何ができるんですか? ギターですか? ドラムですか? キーボードですか? 私から見るとギターっぽいんですけど」

関根が間を開けずに一気に話してきた。

元気なのは分かつたが、限度を軽く超えているぞ。

「ギターだよ。これでも生きてる頃は少しは有名だったんだぞ?」

今朝ゆりに無理を言つて大急ぎでギターを用意してもらつた。
俺が昔使っていたギターと全く同じ物だつた。

ストラトキャスターの青系サンバースト。俺が初めて買ったギター
でもある。

ゆりにギターの詳しい情報を書いて渡すとき頭の中にフツと別のギ

ターのイメージが出てきた。

そっちの方はだいたいの形しか分からなかつたから色だけ指定して俺のギターと同じ仕様にした。

もしかしたら失っている記憶の手がかりになるかもしけなかつたからだ。

そのギターは俺の部屋にしまつておいてある。

「へ～、バンドですか？」

入江も興味津々で聞いてくる。

「いや、ソロだ。地方のテレビで紹介されたこともあつたけなあ確かに路地裏のライブハウスだけにスポットライトを当てた番組だったはずだ。

俺はライブハウスのピPRで一人で演奏をせられた。

・・・誰とだつたけ？

「確かに岩沢もテレビに出たことがあるって言つてなかつた？」

ひさ子が岩沢さんに話をふつた。

「うん、ある」

へえ、岩沢さんも出たことあるんだ。

「ただし、私一人じゃないんだけどね」

ん？一人じゃないって事は岩沢さんはバンドでも組んでたのか？

「え？それってそこにいる綾・・・」

サツ・・・

素早く岩沢さんがひさ子の口をふせいで押さえ込んだ。

ヒソ（その話は今するな！）ヒソ

ヒソ（なんで？アイツはお前の好きな男なんだら？）ヒソ

ヒソ（なんで知ってるんだ？）ヒソ

ヒソ（言わなくても分かるよ。昨日の乱れ具合と今日の笑顔具合で）

ヒソ

ヒソ（な・・・・・）ヒソ

なんで、ひさ子はにやついてるんだ？岩沢さんも動搖しているみたいだし・・・

ヒソ（と、とにかくそのことは後で話すからー今は綾崎と私の事について触れるな！）ヒソ

ヒソ（はいはい、分かったよ）ヒソ
ようやく一人は距離を取った。

何があつたんだろう？岩沢さんは何か疲れた顔してるし。ひさ子はもの凄いにやにやしてるし。

「あの～大丈夫でしょーか？」

「あ、ああ、大丈夫。じゃあ、綾崎、何か弾いて。」

いきなり！？何か弾けて何を弾いたら良いんだよ！？

「どうした？ああ、大丈夫。一曲聴けばだいたいの実力は分かるから

何が大丈夫なんだろうか・・・

「え～岩沢は綾崎のレベルは知つて・・・」

ギン！

岩沢さんがひさ子の方をにらむ。

ひさ子は黙つたけどまだにやついている。

「アンタはちょっと名の知れたギタリストだつたんだろ？聞いてみたいんだよ。アンタの歌」

さつきのひさ子の影響か。岩沢さんは少しそうした感じの上目遣いで見てきた。

う・・・、ヤバイ。このギャップの破壊力はす～すぎる・・・

「わ、分かつたよ」

これで断れるヤツがいたら紹介して欲しいぜ・・・

俺は生前よく弾いていた歌を思い出した。これなら暗譜でいける。目を閉じて深呼吸をした後、軽く指を鳴らした。ギターを弾く前の俺の癖だ。

四人は黙つてこちらを見ていた。周りはシンと静まりかえる。

俺はイントロを弾き始めた。単調な音の並びだが乗りの良い曲だ。

「え・・・」

「こ、これって・・・」

「 C r o w S o n g ~.」

「 」

俺は四人の驚いた表情を気にせず演奏を続けた。

最後の小節が弾き終わった。

のだけど。しばらく沈黙が続いた。

「え~と、誰をなんどうされたので『jazz』ますでしょ~つか?」

「ど・・・」

ど?

「どうして C r o w S o n g を知ってるんですか!~?」

関根が椅子からガタア!と立ち上がりてこっちに詰め寄ってきた。

「ど、どうしてって言われても・・・」

「そういえば何で知ってるんだろう。」

こんな曲歌つてる人が生前いたっけ?

「 C r o w S o n g は岩沢さんのオリジナルなんですよ!~」

「どうか、オリジナルか!~どうりで歌手名が出てこないはずだ。」

「・・・え? オリジナル?」

岩沢さんの方を見るとまだ放心状態で岩沢さんは固まっていた。

「お~い、岩沢さん。お~い」

関根が岩沢さんの顔の前で手を振った。

ハツ!?

・・・どうやら氣がついたらし!~

「綾崎!~なんで!~どうして C r o w S o n g を知ってるんだ!~?」

岩沢さんが俺の襟首をガクガクガクッと揺さぶってきた。

「分からぬ、分からぬけど頭の中にフツと思い浮かんだんだ!~?」

「・・・そつか、分かつた」

よつやく手を離してくれた。

「で？どうだつた？俺の演奏は」

俺はギターをスタンンドに立てかけながら尋ねた。

「え？あ、ああ、正直驚いた。こんなに上手かつたなんて」

「そ、そつか？」

「・・・それに懐かしかつたな・・・」

「うん？何か言つた？」

突然岩沢さんの顔が赤くなつた。

おお、すげえ、一気に赤くなつた。

「な、何でもない！・・・私は十分合格だと思つんだけど。みんな
は？」

「私も異議なし！正直驚きました！」れつて岩沢さんと同じくら
い上手くないですか！？」

「私も賛成です。・・・そうですね。同じ空氣は感じましたけど・・

・」

「・・・異議なし」

びつやう、合格なようだ。

「・・・とこつわけで合格だよ。綾崎は私と同じギター・ボーカルに
しようと思つんだけど？」

三人は特に異論はないようでそれぞれ肯定的な仕草をしていた。

「じゃあ、正式にバンドのメンバーとして歓迎するよ綾崎」

・・・そういうえば俺が入つたらGirls Dead Monst
erはどうなるんだろう？

”Girls”だもんな・・・

まあ、何とかなるだろ。

「改めてよろしく。みんな」

晴れて俺は本当にメンバー入りを果たした。

G i r l s ? D e a d M o n s t e r (後書き)

名前の方は・・・まあ、おいおい何とかします。
それではまた次話！

歓迎会（前書き）

しばらく投稿できなくてすこません。
なにぶん学生の身分なもので忙しくて・・・
できるだけ毎日投稿できるように頑張ります。

それではまたね。

歓迎会

コツコツ・・・
「！」

サツ・・・

コツコツコツ・・・

「・・・ふ」

ソロソロ・・・

「そういうえば生活科のあの教師がや～」「やばい！」

どこか、どこか隠れるといひは・・・

「そこだ・・・」

俺は近くの段ボールの中に隠れた。

「・・・あれ？なんかいた？」

「まさか～気のせいなんじやない？」

コツコツコツコツ・・・

あ、危なかつた・・・

・・・この段階で俺が何をしているかわかつただろうか。俺は今女子寮に潜入している。

別に怪しいことをするつもりはない。断じてない。

ただ、練習後に歓迎会をするといわれて何の疑いもなく承諾してしまったのが間違いだつただけだ！

・・・普通気がつくよな。女子四人が男子寮に行くより男一人が女子寮に行くほうがリスクが低いわけだし。

だけど、あの時の俺は少し舞い上がっていたのかもしれない。

誰かに祝つてもらうなんて数えるくらいしかなかつたもんな・・・

そんなこんなで俺は某、蛇の名前の軍人さんのごとく段ボールに身を隠している。

「・・・さあ、困った」

岩沢さんの部屋（歓迎会は岩沢さんの部屋でやる）はこの寮の最上階にありしかも一番奥の部屋らしい。

廊下までは影があつて隠れやすいが、問題は階段だ。

エレベーターは使えないから階段で最上階に行くしかない。しかし階段は隠れるような場所がない。

だから必然的に段ボールをかぶつて進むしかないのだ。

「よし、綾崎紅騎行きま～す」

俺は慎重かつ迅速に階段を上った。幸い夕食時の時間なので人はいなかつた。

「よし、何とかついた」

俺はドアに岩沢と書いてあるのを確認し、インター ホンを押した。

ピンポーン

・・・ガチャ

ガン！

「おぶうー！」

勢い良くあけられたドアが俺の鼻先にクリーンヒットした。

「よくたどりついたな綾崎・・・って、どうした！その鼻…」

どうしたって…・・あんたがやつたんでしうつが・・・

「・・・いや、大丈夫だ」

なんとなく悪い気がしてその言葉を押しとどめた。

「そう、じゃあ入つて。もうみんな集まってるから」

「・・・おじやまします」

案の定関根と入江の鼻には絆創膏が×状に張られていた。
「ご愁傷様です・・・

「それじゃ、始めようか。綾崎、飲み物は何がいい？」

「一応聞くけど、何があるの？」

「えーと、ルヴィックと、クリスタルカイザーと、ペニヒ、ントリー天然水と・・・」

全部天然水じゃねーか・・・

「・・・なんでもいーよ」

「じゃあ、富山のバナジウム天然水ね」

・・・もひ、なんでもいいつす。天然水好きだし。

ちなみにほかの三人はペットボトルで自分の分を買つてきている。

「よし、じゃあ綾崎がうちらのバンドに入るつてことで・・・」

『かんぱーい!』

俺の歓迎会が始まった。

それから三時間後の午後十時

「お~い、あやさき~ちょおつと、面かしえや~」

・・・なぜだ、なぜ岩沢さんは酔つ払つてゐるよつに見えるんだ?」

「もしかして、岩沢さん酔つてます?」

「ら~にいつてんだあ、わらしほ~ゼ~んぜん酔つてらいぞ~」

酔つてる人のセリフだ!?

「ひさ子・・・岩沢さん、何か食べた?」

「ん・・・」

ひさ子は奈良漬けを差し出してきた。

ほかにアルコールが入つてゐるようなものは無い・・・まさか・・・
いや、確實に酔つてる。

「岩沢さん・・・めつちや酒に弱いじゃないか!」

「あ~岩沢さん食べちゃいましたか~・・・あ、それダウトです」

関根が他人事のように言つた。

「そうなつたら岩沢さん大変なんですね・・・じゃあ、5です」

入江も確實に他人事だ。

「じゃあ、この勝負に負けたやつが後片付け兼、岩沢の相手な・・・
綾崎、6だ」

・・・ひさ子の奴、楽しんでるな。クソッ俺がずっと全敗だからつ
て。

俺の手札には6が2枚ある。

よし、勝負！

「・・・よし、受けて立つ。ひたす、ダウトだ！」

「ふふふ、残念」

ひたすが出したのは本当に6だった。

「・・・綾崎先輩～6はさつき私が1枚出しましたよ～」

「・・・何！？」

・・・てか、なんで関根は分かつたんだ？

「がばー」

突然岩沢さんが後ろから抱きついてきた。

「なんだ～さつきからわらしのこころを無視して～」

ぎゅう～

岩沢さんはお構いなしに強く抱きしめてくる。

「ん～・・・なんだ～綾崎～手札に6と9しかないぞ～」

「わ～言っちゃダメ～！！」

「ふつふつふ・・・わらしを無視した罰なのだ～」

・・・助けて、誰か～～

結局また俺は最下位になってしまった。

歓迎会（後書き）

吉沢さんは酒にめっぽつ強こいイメージとすら弱いイメージがついたので。

弱いイメージをとりました。
・・・いいなあ 紅騎。

せりかけ（前書き）

それでせじいへん

きつかけ

「それじゃあ綾崎先輩、ひさ子先輩、岩沢先輩をよろしくお願ひします！」

「お先に失礼します」

歓迎会はお開きとなり関根と入江は帰つて行つた。

ひさ子はさすがに男女が残ると問題があると思ったのか自分も残ると言つてきた。

こちらとしても大助かりだつた。

俺一人だけで片付けをしながら岩沢さんを流すのは不可能に近かつたからだ。

「あれ、・・・・・関根と入江は帰つらのか？」

ぎゅう〜〜〜

まだ俺に抱きついていた岩沢さんは手の力を強めてきた。

「か、帰りましたよ・・・・つて、苦しい・・・・」

苦しくて呼吸を大きくすると、ふわっと女の子特有の甘い香りがした。

こ、これが女の子の匂いつてやつか・・・・できれば別の時がよかつた・・・・

「ふふふふふ・・・・・じゃあ、私と一人つきりか、あ・や・さ・き」

「み、耳元でささやかないでくださいー」

ぞくつ・・・・

な、何だろう・・・・・真正面から殺氣が伝わってくるのだけど・・・・

「へ、二人つきりか・・・・・ずいぶんと見せつけてくれるなあ？綾崎い・・・・・？」

ひさ子がこの世のものとは思えないほどの形相でこちらを見つめていた。

ゾワゾワゾワ・・・・・！

「ち、違う！これは岩沢さんが！！」

俺はあわてて若沢さんを腕を組んでひねりの前に差し出した。

「すー・・・すー・・・」

「…………寝てゐじやないか？」

」
・
・
・
・
・
」

若沢さん・・・あんた・・・もつアルコールはやめてください・・・

ガスン！

思い切り鍋でぶん殴られた。

俺とひさ子は燃え尽きた（眠りに就いた）岩沢さんをベッドに寝かせて片付け始めた。

とくに大がかりなことはやつていないので十数分で片付けは終わってしまった。

「綾嶺　はい水」

俺はもう用が済んだので帰つてもいいはずだが、ひさ子が話したいことがあると言つてきたのですこし残ることにした。

「で、話つてなんだ？」

ひさ子はテーブルを挟んで相向かいに座った。

「まあ、岩沢に大体のことは聞いたんだけど。お前、ある記憶だけ

「なんたって？」

ああ、そうた、「

「俺は、こつどいで生まれてどんな生活をしてきたか覚えてるんだ」

「まあ、普通のパターンだな。・・・それで、どんな記憶が無いんだ？」

また、難しい質問だな。

「えーと・・・たぶん、”誰か”の記憶が無いんだと思つ。・・・
たぶんそうだ」

「ふ～ん・・・誰かのねえ・・・」

ひたすらはちりひと岩沢さんのまつを見た。

岩沢さんはぐっすり熟睡している。起きる可能性はなさそうだ。
「話は変わるけどアンタ、岩沢のことをどう思つ?・・・

なんでそこで岩沢さんの話題が出てくるんだ?・・・まあこいいけど。
「分かるわけないだろ。まだ知りあつて数日しか経つてないのに
「おかしいな・・・岩沢のまつもつ何年も知り合つてているような
感じだぞ?」

・・・そりゃええだそりだ。

初めて校長室で会つた時。屋上で少し話した時。Crown Son
gを演奏した時。

全部初対面の奴に向ける態度じゃなかつた。

「・・・・・・」

「しかも、最近の岩沢の拳動不審、ぶりは普通じゃない。」

「・・・やうなのか?」

「ああ、そいや、まるで恋をしてるか女みたいな溜息を何回も見
てるしな」

「・・・・・恋?」

見た感じ岩沢さんはギターに恋してますつて感じだけだ。

「ああ、これ以上は岩沢に言つなん・・・・・って口止めをねてるけど
な

・・・これ以上つて、だいぶしゃべった気がするんだけど。

「もしかしたらお前の失つた”誰か”の記憶つて岩沢のことつだた
りして・・・」

「・・・かもな、その可能性もあるかもしねない」

俺は立ち上がりて部屋を出ようとした。

「・・・早く戻るといいな、お前の記憶」

「・・・ああ

玄関の扉を開けて急いで外に出た。用が済んだ以上ここについてはまづいからな。

俺は女子寮と男子寮のちょうど真ん中あたりにあるベンチに座った。

「・・・記憶か」

俺は”誰か”の記憶を失っていることは大体わかった。

問題はその記憶が誰の記憶なのかだ。

覚えているだけの記憶を探つてみる。

思い出すたびに引っかかるのはライブハウスでの記憶とどこかの公園の記憶と商店街の記憶だ。

今日四人の前で演奏したCrow Song

あれは突然ふと出てきたものだつた。

同時にこの曲がとても気に入つてたこと。“誰か”と弾いていたことを思い出した。

それにAlchemyだつて初めて弾いたような感覚ではなかつた。Crow Songと同じような感覚を感じた。

「触れるものを輝かしてゆくそんな道を生きてきたかつたよ・・・

(悲しい歌だな)

(まあ、私の人生だからね)

(・・・でも強い歌だ。力強くまつすぐ前を向けさせてくれる)

(私もこんな人間になつてみたかつたなあ)

(なれるよ、今からでも遅くはないし、俺がそれを一番わかってる)

(あ、ありがと・・・)

「! !

な、なんだ・・・今のは。

これが・・・”誰か”的声・・・?

なんだろう、すげー懐かしい感じがする。

「・・・帰るか」

俺は男子寮に戻つて深い眠りに就いた。

きっかけ（後書き）

挿絵が無いって不便ですね
しかし！読者さんの想像力は無限大です！！
土日はすこし多めに投稿したいと思います！
・・・忙しくなれば（ＴＡＴ）

オペレーション・トルネード発令～（前書き）

それでは、どうぞ～

オペレーション・トルネード～発令～

歓迎会の数日後俺と岩沢さんは校長室（前線基地？）に呼び出された。

なんでもこれから作戦会議を始めるらしい。

校長室にはゆりと、日向に音無と椎名、そのほか四・五人の戦線メンバーが集まっていた。

「みんな揃ったようね、それじゃあブリーフィングを始めるわよ」

例の「ごとく部屋が暗くなつて上からプロジェクトが下りてきた。

「今回のオペレーションは”トルネード”を実行するわ」

トルネード？学校に竜巻でも起こすのか？

「トルネードってのはどんな作戦なんだ？」

音無が質問した。

ああ、そういえば「イツも新入りだつたんだつけ。
簡単に言つと食券の巻き上げよ」

ああ、だからトルネードか。納得。

「巻き上げつて、かつ上げでもするのか？」

「やだ、音無クンつてば激しいのがお好み？」

ゆりがわざとらしくイヤーンとしなを作つた。

「じゃあ、どう違うんだよ！？」

・・・だよなあ、かつ上げと巻き上げの違いなんて無に等しいから
な。

「それは後になればわかるわよ。この作戦のメインは陽動班だから
え？俺たち？」

岩沢さんのほうを見ると静かにつなずいた。

「私たち前線チームの任務は、陽動班が動いている間天使を近寄らせないことよ」

そういうや、これが俺の初ライブだったな。

・・・あ、そういえば男の俺が出てくるのってファンの人たちはど

う思ひんだろ？

「・・・なあ、若沢さん」

「ん、何？」

「バンドの名前つて覚えるのか？男の俺がいぢや “Guitar” じゃないだろ」

「ああ、ダイジョウーブ」

軽いなあ・・・

「なんでもう言い切れるんだ？」

「一・二日前コイ達にうわさを流せたんだよ。ガルデモにめちゃくちゃ上手い男が入るらしきってね」

「それで・・・反響は？」

「かなり良かつたってさ」

よ、よかつた・・・

「安心するのはまだ早いよ、アンタはめりやけ上手こいつになつてるんだからね。」

・・・そうでした。

「下手な演奏はできないな・・・」

無論失敗もだ。

「ん、ん、ん、そこのお一人さん、お話はもういいかしら？」

あ、そういうえば今はブリーフィングだった・・・

『す、すみません・・・』

「じゃあ、作戦は今日の1800時ね、陽動班は1730時まで待機してて。後のみんなは細かい打ち合わせをするからちょっと残つて」

『はい』

・・・俺の初ライブか～なんだかわくわくするな～

「じゃあ、私たちも打ち合わせをするからこいつもの場所に行こう」

「ん？あ、ああ分かった」

そして場所を移し、いつもの面々がそろつた。

「じゃあ、今日の六時ジャストからゲリラライブをやるからそのつもりで

「わつかりました～」

「はい」

「りょーかい」

さすが、やりなれているのかいつもと変わらないテンションだ。俺だけわくわくしてて少し恥ずかしい気もする。

「・・・で、何を演奏するんだ？」

「いつもは大体一曲で終わりだけど今回は新メンバーもいるから一曲でいいかな？」

「あ！ そういうえば綾崎先輩は今回が初ライブなんですね！」

「…忘れてたのか、関根よ。

「じゃあ、Crown Sonata Alchemyでいいと思います」

「…てかそれしか練習していないんだよ、入江よ。

「ユイの話によるとすぐ期待されてるんだって？ 綾崎」

「ああ、俺はうわさ上だとめちゃくちゃ上手いそうだ」

「はは～…じゃあ、失敗はできね～な～」

他人事みたいに言つた、ひたすらすでに緊張しかけてるんだ。

「じゃあ、移動を始める1730時までリハを兼ねて練習」
「…みんな俺のことは全く気にかけないで…」
「泣くぞ！ 泣いちゃうぞ！」

「大丈夫です。綾崎さんなら上手く出来ますよ」

「…その優しさが心にしみます。入江サン…」

それから戦線メンバーの奴が呼びに来るまでみっちり練習した。

オペレーション・トルネード発令～（後書き）

次回は紅騎の初ライブです！
お楽しみに

オペレーション・トルネード／準備編

「陽動班は食堂のホールに移動してください」

五時三十分ジャスト、戦線の一人が呼びに来てくれた。

「じゃあ、行くとしようか」

岩沢さんがギターケースを担いで立ち上がった。

それに続いて俺たちも楽器を持つ。

入江はドラムのセットがあるのですでに移動している。

「緊張しますか？」綾崎先輩！

「いや、あんまり」

正直少し緊張はしているが思つたよりも落ち着いていた。
ほどよい緊張感と言づヤツだろ？

「さすが・・・大物～って感じがしますよ」

大物か・・・まだそんな器じやないけど。

関根の緊張をほぐそつとする誠意は伝わってきた。

「ありがとな、関根」

関根はうれしそうに跳ねながらついてきた。

「やつほ～、綾崎先輩にお礼言われちゃつた」

関根の気分も上がってきたようだ。

「では、こちらに楽器をセットしておいて後は食堂で待機してください

さい」

「あ～、綾崎はここで待つてな」

岩沢さんが椅子とルヴィックを渡してきた。

ああ、そうか。ライブで紹介することになつてるんだっけ。

「分かった

「ついでに私たちの楽器のチューニングも頼んだよ

ひさ子が注文してきた。

まあ、いつか。これから三十分何もしてないんじや暇すぎるからな。

「オーケー、半音下げでいいか？」

「ああ、それでいい」

三人は入江の待つてゐる食堂に姿を消した。

「・・・さて、やつちやいますか」

まず関根のベースを調節する。

「結構ベースつて重いんだな・・・」

あの小さい身体でよくもあんなにパワフルな演奏ができるな。
ベースの弦は4本しかないから楽だな。

まあ、六本も4本もあまり変わらないけど。

次にひさ子のギターを調節した。

弾きやすそうだなあ、ひさ子のギター・・・

こつちは手慣れているのですぐに終わった。

最後に岩沢さんのギターを手に取った。

「・・・・?」

このギター・・・どつかで見たことがあるような・・・

ストラトキャスターで、色は普通のサンバースト。どこでもありそ

うなタイプだけど・・・

そこじやないんだよな・・・視覚的な記憶じゃなくて、実際に手で

触つたことがあるような・・・

おそるおそるチューニングを開始した。

(紅騎、エレキのチューニングつてフォーカクと変わらないの?)

(だいたい同じだけど、ちょっと便利な道具がある)

(何それ、メトロノーム?)

(エレキは「イツに直接つないでチューニングができるんだ)

(へへ、けど紅騎は耳が良いから使わなくてもいいんじゃない?)

(普段使うときはな、けど!!ライブの時は使ってるよ)

(ふうん・・・)

・・・まだ、また前みたいな声が聞こえてきた。

チューニングを終えてそれぞれの配置に楽器を置いた。

ひねNの書いた通りやっぱり何か関係があるのか？

・・・並沢と

オペレーション・トルネード～準備編～（後書き）

また、記憶が少し戻りました。
次は実行編です。

オペレーション・トルネード実行編（前書き）

それではどうぞ～

オペレーションオ・トルネード実行編

「入江から遊佐です。音声・照明の準備が完了しました。そろそろ良いと思われます。」

四人の周りには気がついたファン達が押し寄せてきている。

「オーケー・・・それじゃあ、始めるとするか」

四人は紅騎が待機しているステージ裏に向かった。

「どうだい？綾崎、チューニングは？」

ひさ子が言いながら自分の楽器の調子を確かめていた。

「・・・っ・・・うん、良いじゃん」

やつぱり分かるもんなのか。

岩沢さんがマイクスタンドの前に立った。

「みんな、準備は良いか？」

俺、ひさ子、関根、入江は同時にうなずいた。

入江は小さく深呼吸をしてドラムを叩き始める。

それに合わせて俺たちは演奏を始めた。

何事もなく最初の曲、Crow Songを弾き終わった。

あたりは熱氣が立ちこめている。

すげえ、これがライブってヤツなのか。

何百人の大人数が一つのリズムを取っている様子はまるで一つの生命体のようだった。

「みんな、いつも通り集まってくれてありがとうございます。早速だけどコイツが新しいメンバーの綾崎紅騎だ」

スポットライトが一斉にこちらを向いた。

・・・これは、何か言わないと駄目なのか。

「どうも、ギター・ボーカルをやつてます。」

俺は挨拶代わりに、ギターを弾いて見せた。

・・・人前でこんなコトするのは初めてだな。

ワアアア・・・・

おお、良い反応だ。

「・・・とまあ、腕は確かだからみんな安心して。それじゃあ、最

後行くよ」

岩沢さんがフイードバックを始める。

Alchemyは前奏の前に必ずこれをやる。

・・・練習じゃ、つるさこからやらないらしいけど。

間髪入れずに前奏も弾き始めた。

一方前線組は戦線の敵、天使と壮絶な撃ち合いをしていました。
しかし、撃ち合ひと言ひには一方的すぎた。

天使のスキル、Destortionはどんなに鉛の弾丸を撃ち込んでかすりもしない。

「・・・くそ、もうDestortionまで出しやがったのか」「

音無や日向達はかまわず撃ち続けた。一応足止めにはなるからだ。

「どけ、お前らああああ！！！」

野田が、とんでもない跳躍力でジャンプし身長ほどのある斧、
ハルバードを掲げた。

「死ね、オルルルルアアアア！！！」

ふと、音無は思つた。自由落下は言葉ほど自由なものじやないと
うことを。

野田は馬鹿正直に”真つ直ぐ”天使につっこんでいた。

「ああ、馬鹿・・・」

その場にいた全員がそう思つた。

天使はその場から数歩だけ遠ざかつた。

「ば、馬鹿なああああ！？？」

馬鹿はお前だ、野田。

ズドーーン・・・

野田は橋に思いつきり激突し、橋の支えごと粉碎した。

「逃避！逃避いい！！」

「野田の大馬鹿野郎おおおお！？！」

ついでに周りにいた天使と他、数名の戦線メンバーを道連れにして

野田は橋と共に崩れ去った。

日向と、音無はすぐに逃げたので大丈夫だった。

「・・・あつちも終わつたみたいだぜ」

食堂の方を見ると大窓から白い何かが雪のように舞っていた。

一枚をつかんでみると、肉うどんと書いてあった。

「・・・食券？」

「そう、これがオペレーショントルネードだ。・・・お前、そんな
んで良いのか？」

良いも何も、俺はあまり腹が減ってなんだけど・・・

音無はばつが悪そうに食堂に向かった。

オペレーションオ・トルネード実行編（後書き）

野田つていいキャラしてるよな
とくにかませ犬なトコガ（笑）

オペレーション・トルネード～打ち上げ～（前書き）

オペレーション終了後の打ち上げです。
それではどうぞ～

オペレーション・トルネード～打ち上げ～

「じゃあ、オペレーション成功に乾杯！」
ゆりが高々とオレンジジュースの入ったコップを掲げた。

『かんぱーい！』

それに合わせてみんなもコップを掲げた。

それにしてここまで大胆な手段を使うとは思わなかつた。
食事時をねらつて陽動班がゲリラライブを始める。

当然天使は止めに来るが、そこは前線組が阻止する。
頃合いを見て、他のグループが用意した巨大扇風機を作動させて、
学生達の食券を一気に外に舞いあげる。
そこを前線組が回収。

とんでもなく計画的な犯行だ。

「・・・で、俺の報酬は白米に漬け物と？」

俺に渡された食券はご飯特盛りとみそ汁、馬鹿でかいキュウリをま
るまる一本漬け込んだぬかずけだつた。

日本の朝の食卓か！

「ご愁傷様・・・」

俺の相向かいに座つている岩沢さんはカツカレーを食べていた。
ギュルルルル・・・

い、いかん・・・カレーのにおいが俺の腹の虫を誘惑する・・・
「カツ、一個あげようか？」

岩沢さんがヒレカツをすくい取つた。

「いいの！？」

「ああ、私肉あんま得意じやないから・・・」

そう言つて全てのカツを俺の所に移してきた。

「一個くらい食べなつて、ヒレだから油も少ないんだうし」

俺は一個カツを戻した。

「・・・分かつた」

よし、これで食事に華が加わったが

「いただきま～す」

ガツガツガツ・・・・ン！

「む、んぐ～～！？」

み、水！

あわててコップを傾けた。

な、無い！～？

「大丈夫か？ほら、水」

岩沢さんが水の入ったコップを差し出してきた。

バツ！

ゴツゴツゴツゴ・・・

「・・・はあ、はあ、・・・」

た、助かつた。

「サンキュー、岩沢さん」

俺は、岩沢さんにコップを返した。

「あ、ああ・・・」

？、どうしたんだろ？岩沢さん。耳が真っ赤になってるが・・・

「岩沢さん・・・耳赤い・・・」

耳の所をつかんでジエスチャーをした。

「い、いや、何でもない！」

あわててカレーを食べ始めた。

かなり動搖しているのか、口に運んでいるスプーンには何も乗っていないことを岩沢さんは気づいていない。

パカツドバドバドバ～

ん？何の音だ？

氣のせいだろうか、俺の茶碗から七味唐辛子のきついにおいがするのは。

・・・氣のせいじゃなかつた。

「ひ、ひさ子！？なにしやがる！～」

ひさ子は空になつた七味のビンを握りながら邪悪な笑みを浮かべて

いた。

「なにしやがる？ それはこっちの台詞だよ」

ひさ子は七味のビンをテーブルに置いたかと思つと素早い動作でスティックシュガーを十本俺のみそ汁に入ってきた。

「ニ○○○○○○○！！」

「さつき、岩沢とさりげなく間接キスをましたのはどこのどいつかなあ？」

「ぶー！」

突然岩沢さんが盛大に水を拭いた。

岩沢さんはあわてて紙ナップキンで後始末を始めた。

「ほらあ、岩沢だって気にしてたんじゃないの。あんなにクールに

はい、水・・・って言つてたのに～」

岩沢さんはさつきとは比べものにならないほど赤面していた。

うわあ、すげえ・・・完熟のリンゴみてーだ。

「・・・綾崎」

岩沢さんがじいいい・・・と見つめてきた。

どうでも良いけど岩沢さんってまつ毛長いんだな。

「は、はい・・・なんでしょうか？」

俺はおそるおそる聞き返した。

「・・・覚悟しとけよ？」

いつも岩沢さんが笑つた。

ひさ子のような悪魔の笑みじゃなくいたずらひ子のような笑みが逆に怖かった。

オペレーション・トルネード～打ち上げ～（後書き）

岩沢さんの「ト」レ全開です。
次回紅騎の身になにが！？

記憶の整理（前書き）

砂糖入りの味噌汁ってどんな味がするんでしょうね？

・・・・。

それではどうぞ～（泣）

「…………眠れん！」「

俺はがばあーっと布団から起きあがつた。

午後十一時。

当然寝ていなきゃ行けない時刻なのだがせつきの七味ののつけ盛りと砂糖入りのみそ汁がまだ効いていて、全く眠れない。

「くそーひさ子の奴～」

まあ、俺があわてて食ったのが悪いんだけどさ・・・別に黙つておけばお互い意識することもなかつたのに。

「・・・間接キス・・・ねえ」

「へ～そのお相手は誰なんだい？」

いきなり真横から声が聞こえてきた。

「のわあああ！？」

あわてて振り返るとそのお相手の岩沢さんが立つていた。

「い、岩沢さんどうしてここに！？つーかどうやってここに！？」

「ん？ああ、ドアの鍵が開いてたから」

・・・堂々と正面突破してきたわけですか。

「じゃあ、何でここに来たのでございましょうか？」

岩沢さんは近くにあつた椅子に腰をかけた。

「まあ、ちょっと話したいことがあつてね。あと用事もあつたし

男子寮に堂々と入ってきたことはこの際気にしないでおけ。

「・・・話したいこと？」

何だい？ライプのことかな？

特にミスはしていないはずだ。強いて言つなら挨拶が多少無愛想だった気がしたくらいだが。

「あれからアンタの記憶は進展があつたか？」

ああ、そのことか。

まあ、俺がバンドにはいるのが岩沢さんが協力する」との交換条件

だつたからな。

「まあ、一応は」

断片的に思い出せているのは、誰か”の声だけだが、だいたい予想はできる。

「俺は、岩沢さんの記憶を失っているんですね？」

岩沢さんはすゞしく複雑な表情をしていた。

嬉しさ4割、悲しさ6割といったところか。

・・・当たりか。

「・・・どうしてそう言こられるんだ？」

あえて聞き返してきた。

「まず、俺が断片的な記憶を思い出すときは全部岩沢さんが関わっています」

Crow Songを披露したとき。

A Little Songの一部分を口ずさんだとき。

岩沢さんのギターをチューニングしたとき。

全部岩沢さんが主として関わっている」とばかりだ。

「それに普段の岩沢さんと比べた最初俺と会ったときのコラクション」

最近感じたことだけど、確かにあのときの岩沢さんは取り乱していた。

岩沢さんだけが俺を知っている。

・・・逆に言うと俺は岩沢さんの記憶を失っていると言える。

「最後に、俺は岩沢さんと初めて演奏をしたとはいつも思えないんです」

「・・・そう」

「はー、あのライブで岩沢さんがどのタイミングでどんな音を出して欲しいのか身体が反応したんです。」

「偶然の可能性もあるぞ?」

「偶然じゃありません。Crow Songで間奏のタイミングが練習よりも少し早くなるのもちゃんと分かっていました」

「・・・・・」

岩沢さんは黙つた。

しばらく沈黙が続いて重い空気が流れた。

「もうか・・・ちゃんと分かつてたんだな・・・そつか・・・そつか・・・

か・・・」

岩沢さんは何度もそうか、と繰り返した。

まるで、今の現実を必死に受け止めているよつにも見えた。
「確かにアンタが失つてるのは私の思い出だよ。・・・断言はまでもないけどね」

「・・・まだ反論しますか、この人は。

「あの・・・」

岩沢さんは俺の言葉を遮つて続けた。

「でも、私が知つている綾崎紅騎はちゃんと記憶を取り戻した綾崎
紅騎だからな」

「・・・どういう意味だらう。

・・・・・・・・・・。

ああ、岩沢さんは遠回しに肯定しているんだ。

”絶対に”俺が岩沢さんの記憶を失つてているだと。

「あ、そう言えば私と関わったときに少し思い出すと言つたな

・・・覚えてましたか。

「・・・・・じゃ、じゃあ、今後は私ともひともひと関わつても・・・

・良いぞ?」

岩沢さん、なぜそこでもじもじするのですか。

(無理だらうけど)自覚してくださいーーそのギャップが(男にとつて)
一番キケンだと言つことをーー

「ど、どういう意味つすか・・・?」

わあああー俺の馬鹿!何で聞き返しちゃうんだ!

そこは、「頑張つてみる」とか「ああ、よろしく」で収まつたはず
だぞー?」

「た、例えば・・・・」

ふわっ・・・

突然柔らかい温もりを感じて同時にかすかな甘い香りを感じた。

「い、岩沢さん！？」

岩沢さんに正面か抱きしめられて、「と」はくづくのに数秒かかりました。

「・・・どうだ？何か思い出したか？」

岩沢さんは抱きしめながら耳元で囁いてきた。

正直心臓がバツクンバツクンしていくそれほど心地じゃない。

「いや、特には

・・・だ・か・ら！俺よー今そんなこと言つたらー！

岩沢さんが離れちゃうかもしぬないだろー！？

こんなシチュエーション滅多にないだろー。つーか今ぐらじしかこのんな機会無いんじやないか？

・・・そつか・・・なら・・・

・・・え？

岩沢さんがとんでもない行動に出た。

・・・俺を・・・押し倒してきた

「これなら・・・どうだ？」「

重力つてすごいな。

岩沢さんとの密着度（？）がさらに高まつた。
俺の心臓はさらに加速した。

や、やっぱい・・・冗談抜きで爆発するかも・・・

・・・？綾崎、すじこ・・・キドキしてる・・・？

ば、ばれた！？

「いやあ・・・まあ・・・はい」「

今俺の顔を見たらかなり真っ赤になつてるんだもん・・・

「わたしも・・・同じだから・・・」

・・・確かに俺の心臓とは違うリズムで鼓動を感じる。

俺より少し速いかもしない。

「岩沢さん・・・俺より・・・」

「言ひな・・・

キュッ・・・

少し抱きしめる力を強くしてきた。

「！！」

その瞬間俺は頭痛を感じた。

「どうした！？一体どうしたんだ！！綾崎！！」

痛い・・・マジで頭が割れそうだ・・・

「ぐ・・・つ！・・・が、くううう・・・・・・！」

だ、誰か・・・助・・・け・・・

「綾崎、綾崎！？」

徐々に意識が遠のいてきた。視界も暗くなり始める。

「誰か・・・誰かああ！」

岩沢さんはあわてて外に飛び出していった。

「岩・・・沢・・・」

そして、俺の意識は完全に消え去った。

記憶の整理（後書き）

岩沢さんの現段階では八割くらいのトレードです。
どうでしたか？

・・・とまあ、最後は事件ですね。

物語は一つの山場を迎えます。

次回をお楽しみに。

新たな作戦（前書き）

突然倒れた紅騎。

心配する間もなく岩沢に新たなオペレーションが！
それではどうぞ～

新たな作戦

俺はある大きくもなく小さくもない町に生まれた。

物心ついたときから母親はいなく、親父と俺の二人暮らしだった。
・・・・だけど、俺の親父は俺が知っている中で一番最低な男だった。

会社をクビにされてから酒と博打の毎日で、俺に対する暴力も日常茶飯事だった。

当然学校に行ける金もなく、俺はバイトで一日一日を何とかしのいでいた。

家の事情を察してくれた店のオーナーが俺にすも込みで働くようになってきた。

俺はそれに賛成し、何とか親父を説得しようとした。

親父は最初は反対したが、仕送りをするという条件で渋々納得した。はれて俺は親父から解放され、街の小さなライブハウスに住み込んで働くようになった。

それから一年、俺はちょうど十六歳の誕生日の時にギターを買った。ストラトキャスターのブルーサンバーストだ。

そして俺は毎日狂ったようにギターの練習をした。

指の皮が裂けて血がにじんでも弾き続けた。

今思うと俺は、ギターに取り憑かれていたんだと思う。

それから半年、親父が突然死んだ。事故死だそうだ。

葬式も小さいもので、参列者は俺とライブハウスの関係者くらいだった。

親父が残したのは生命保険と、家と多量の借金だけ。

俺は生まれ育った家を売り払い、その金と保険金で親父の借金を返した。

それでも、二十万ほど借金が残った。

それから俺は近所のボロアパートに引っ越しをした。

ギターの練習も今まで通りにできないので、駅前の公園を練習場所に選んだ。

街中にもかかわらず夜は人がいないし、商店街に出れば路上で披露ができるからだ。

・・・そしてまた代わりばえのしない毎日が繰り返されていった。

「若沢さん！ 綾崎君が倒れたって本当！？」

私が日向と音無を呼んで綾崎を保健室に連れて行つた朝。ゆりが血相を変えて保健室に転がり込んできた。

「ああ、本当だ」

「で！？、綾崎君は？」

ゆりは綾崎が寝ていいベットを見た。

綾崎はまだ起きる様子はない。

「・・・どういう事なの？」

私は、昨日のことを包み隠さず説明した。

・・・・もちろん押し倒したこともだ。

「若沢さんって、結構大胆なのね・・・」

ゆりはあきれ半分、驚き半分といった感じで聞いていた。

「ああすれば綾崎の記憶が元に戻ると思ったんだ」

・・・すごくドキドキしたけど。

「で、それでこうなったと・・・」

ゆりは綾崎のほうをちらつと見た。

綾崎は少し苦悶しているような表情をした。

「ああ・・・そうだ、認めたくないけどね」

私が原因でこうなってしまったのは事実だと思つ。

夕食の時にひな子の悪戯したことが原因だと思つて、保健の教師に

相談したらあいにくだが違うやつだ。

タタタタタ・・・・

ガラガラガラガラ！！

「はあ、はあ、はあ・・・・」

突然ひさ子がもの凄いあわてた様子で駆け込んできた。

「ひ、ひさ子？」

「綾崎は、綾崎は大丈夫なのか！？」

間髪入れずに私に詰め寄ってきた。

「だ、大丈夫だからひさ子。落ち着け」

「私が！？私のせいなのか！？私が綾崎のご飯に七味を持ったりみそ汁に砂糖を入れたりするから！！」

ひさ子・・・やり過ぎじゃないかな・・・

「大丈夫、ひさ子のせいじゃない・・・・

ひさ子はほつとした様子で胸をなで下ろした。

「は～良かつた～・・・じゃあ、何が原因なんだい？」

・・・・困った。ひさ子には説明した方が良いのかな？また綾崎が困らないかな？

「ああ～・・・えっと・・・そのお・・・・

う～・・・どうやって言えば良いんだろう・・・

「ちょっととした過労みたいよ、ね？岩沢さん

・・・・グッジョブだ、ゆり。

「それって、前岩沢が倒れたときと同じもんなのか？」

そう言えば私も倒れることがあつたなあ。

確かに死んだらメシは食べなくて良いんだと思いこんで、曲作り中何も食べなかつたのが原因で・・・

「・・・多分そう

ゆりは私の方を何とも微妙な笑顔で見つめてきた。

「な～んだ、そうだつたのか。じゃあ、大丈夫だ」

ひさ子は納得したらしく、保健室から出て行つた。

「じゃあ、私も行くわね。ああ、そうそう。1300時からブリー

フィングだから遅れず来てね
ゆりも保健室から立ち去った。

今度はどんな作戦なんだろう・・・

綾崎は、作戦前には起きてくれるかな?

私は綾崎の額にそつと触れた。

「・・・・・、・・・・・すー・・・・・すー・・・・」

少し綾崎が笑つた気がした。

私はブリーフィングが始めるぎつぎつまでもう一つしてこないことにした。

新たな作戦（後書き）

「」は原作の二話あたりの話になると想います。
まあ、原作もへったくれもないんですけどね。

ブリーフィング（前書き）

「」はちょっと短めです。

小休止的な？

それではどうぞ～

ブリーフィング

「今回の作戦は今までより大がかりなものになるわ」「
ゆりはいつも通りに作戦の説明を始めた。

結局綾崎は目覚めることもなく、ずっと眠つたままだ。

「・・・で、今回は何をするんだゆりっぺ！？」

田向が期待するようなまなざしを向けながら聞いた。

「今回は潜入ミッションよ」

部屋が暗くなり、プロジェクトターが降りてきた。

映像に映し出されたのは天使の詳細情報だつた。

「私たちが潜入するのは天使のねぐらよ」

音無を覗いた全員が苦笑した。

たぶん音無は”ねぐら”がなんだか分からぬんだろう。

「今回の作戦は私たちだけじゃ遂行は難しいわ・・・そこで！」

タイミング良くゆりのとなりにひとりの男子生徒が現れた。

「これから戦線の頭脳になるであろう参謀の竹山君よ！」

竹山がわざとらしく眼鏡をきらりと光らせた。

「竹山です、今後僕のことはクライストと呼んでください」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

部屋中が何とも言えない微妙な空氣に包まれた。

「じゃ、じゃあ竹山君！作戦の説明をお願い」

「了解しました・・・」

竹山（クライストと呼ぶ気はない）がゆりと場所を代わった。

「今回の作戦はスピードが命です。ですので少人数のグループで迅速にねぐらに突入し・・・」

画面にデフォルメ化されたゆり達が映し出されて、秘密研究所のような場所に突入していった。

「天使の所有しているデータバンクに進入し情報を盗みだします」
けんきゅうじょと書かれた部屋から次々と風呂敷を担いだ戦線メンバーが脱出してきた。

「まあ、こんなところね。作戦は四日後の1400時から開始するわ」

ふたたびゆりが竹山の前に出てきた。

「それじゃあ、各自準備をしつかり整えること。解散！」
部屋が明るくなり、プロジェクトが格納された。
私もひさ子達がいる第二講義室に戻った。

綾崎が起きなかつたときどうするか、よく相談しないといけないからだ。

ガラガラガラ・・・・

「・・・・・」

「あ、岩沢先輩！綾崎先輩は大丈夫なんですか！？」
部屋に入つてから早速関根に問いつめられた。

「ひさ子から聞いただろ？大丈夫、軽い過労だつてさ」
関根がほつとした様子で近くの椅子に座つた。

「過労・・・綾崎さん、ライブ慣れしてなかつたんでしょうか？」
ぽつりと、入江が独り言のような小さい声で言つた。
・・・アイツがライブ慣れしてないのは正解だらう。
だけど本当の理由は言えない。

今は作戦の前、つまりライブの前だ。よけいな事は考えさせない方が良い。

「大丈夫さ、綾崎は・・・」

私は、ギターの用意をしてみんなに練習をするように促した。

ブリーフィング（後書き）

とうづけで竹山君登場です（笑）
便利ですねー・・・いろいろ・・・
ではまた次回！

田嶺い（前書き）

紅騎の過去です！
それではどうぞ～

俺が一人暮らしを初めて半年、世間なら高校一年に進級している季節だ。

元々手先の器用さには自信があった俺はライブハウスの隣にあった倉庫で楽器の修理をするようになった。楽器一つ一つに持ち主の思い出があり、また使えるようになつて喜ぶ人たちの笑顔は好きだった。

そしていつも通りに公園でギターの練習をしようとした。夕方まで降っていた雨も止んで、空は星がちらついていた。公園に入つてベンチの方を見ると今日は先客がいた。二つ並んでいるベンチのうち、いつも座つているほうに一人の少女が座つていた。

年は俺と同じくらいだろう。

赤い髪のセミロングヘアは活動的な印象を与えていた。

少女はぼろぼろになつたギターを立てかけてじつと夜の空を見ていた。

仕方なく俺は隣のベンチに座つて練習を始めた。

今日一人のお客さんに教えてもらつた左手の動きを速くする練習を試してみた。

初めはつつかえつつかえで難しく感じたが、回数を重ねると少しづつまともになつてきた。

「うーん・・・もう少しか・・・」

今度はコードの練習、これはいつもやつている事なので目立つた間違いはなかつた。

次に軽くメロディーを弾いて、最後に曲作りを始めた。

曲名もメロディーも全く決まってないが、だいたいの全体像は決めてある。

「・・・・・・・」

「…………」

「…………」

「…………」

「…………」

「俺は観念してさつきから視線を送つてくる女の子の方を見た。

「…………」

「俺は観念してさつきから視線を送つてくる女の子の方を見た。

「うちの台詞だ！？」

女の子の方から聞いてきた。

「うちの台詞だ！？」

女の子は構わず前屈みになつて「ううう」と視線を向けた。

「上手いね…………アンタ

初対面の人間にアンタですか……

まあ、いいけど。

「そりや、ビーも

「初対面の人間に對してぶつきらいぱすしきないか？」
お前が言つか！？」

「…………」

「悪かつたって、すねるなよ。」

うーん…………タメ以上だつたら許せる範囲の態度なんだけどなー……

「一応言つておくけど、俺は本来なら高一になつてこないとしだ」

「…………留年？」

「違う！断じて違う！」

ちくしょー…………なんで振り回されてるんだろうな……俺。

「じゃあ、高校に行つてないとか？」

「そうだよ…………」

女の子は驚きよりもむしろ喜びの表情を浮かべた。

「なんだ、私と同じだ。ちなみに私も本来なら高一の年だよ

最後に留年じゃないぞと付け加えてきた。分かってるっての。

「君もギターやってるの？」

俺は横目でぼろぼろのフォークギターを見ながら聞いてみた。

「ああ、十六歳くらいからね」

・・・・じゃあ、ギター歴は俺と同じくらいか。

女の子は俺の視線に気がついたのかそのフォークギターを膝に乗せた。

「前使ったのは親にスクラップにされかけってね・・・『コイツは今日拾つたんだゴミ捨て場で』

だからそんなにぼろぼろなのか・・・今日拾つたってことは雨の中見つけたって事だよな・・・

幸い弦はそんなに傷んでなかつた。

「・・・スクラップ?」

「ああ、私がバイトに言つてる間に父親がバットでたたき割つたんだ

父親か・・・俺の親父もろくな奴じやなかつたな。

「・・・・・」

「そのときはかなり頭に血が上つたよ・・・だけど女の私じや敵わなかつたよ」

女の子は諦めきつた笑顔ではははと笑いながら腕をまくつた。
腕には複数の痣と切り傷があつた。

「・・・・・どうして・・・」

俺は気づいたら女の子を抱きしめていた。

「ちよつ・・・・・いきなり何・・・・・く、苦し・・・・」

俺はずっと大切にしていたものを壊されて、その上暴力までふるわれたのに笑っているこの子が怖かつた。

こんなにも一つのことに必死になつていて、否定しかされてないこの子が悲しくて仕方がなかつた。

「どうして笑つてられるんだよ・・・平氣で話せるんだよ・・・

俺の親父も俺が稼いだ金を力ずくで奪い取り、全てギャンブルにぎ込んでいった。

俺が金はもう無いと言つたら氣が済むまで殴つてきた。

「・・・・・もう、いいんだよ・・・私なんて・・・」

「・・・・・」

「私なんて生きている意味がない・・・・・そう考えたら父親の仕打ちもなんだかどうでもよくなつて生きてる意味がない・・・・・か・・・・」

「・・・・・けるな・・・・」

俺は怒りを覚えた。

むろんこの少女に對してだ。

「・・・・え?」

「ふざけるな!何が生きている意味なんて無いだ!死ぬことに甘えんじやねえ!」

俺はぼろぼろのギターを持つて、女の子につきだした。

「これがお前の生きる意味だ!好きなんだろう!?大好きなんだろう!?ギターが!音楽が!」

女の子は驚いた表情をしていたが首を縦に振った。
ああ、なに言ってんだろうな・・・俺・・・・」こんな見ず知らずの女の子に。

・・・でも止まらなかつた。

同じような境遇で同じ年の奴が生きることを諦めているのが許せなかつた。

「だつたら生きてる意味なんて無いとか言うな!悲しかつたら泣けばいいだろ!泣かない奴が正しいなんていつ誰が決めたんだよ!」

俺は自分のギターを構えた。

エレキだからなんて関係あるか!弦があれば、音があれば音楽なんだよ!

「・・・・・これが俺の歌（My Song）だ」

そして、たつた今完成したMy Sonを弾き始めた。

出番（後書き）

次回は潜入ミッションの話です！

・・・・ああ！三話つて吉沢さんが・・・・

さあ、どうなるのか（悪笑）

実はまだどうなるのか未定です！

お楽しみに！－！－！

潜入作戦（前書き）

それではどうぞ～

潜入作戦

作戦日當日。

今回はいつものような小規模のライブではなく体育館を占拠する大規模なゲリラライブだ。

その分学校側の反発も強くライブの途中に教師達が押し寄せてきても不思議ではない。

「結局起きましたね～綾崎先輩・・・」

関根が独り言のようにつぶやいた。

そう、綾崎は當日になってもいつこうに田を見ます様子を見せなかつた。

結局元のガルデモに戻ってしまったわけだ。

「まあ、起きないのはしようがないさ」

私たちはステージの裏で曲順などの最終チェックをした。

そして幕の下ろされたステージに上がった。

壁には一つのアコースティックギターが立て掛けであつた。

「・・・特等席だ」

私はそうギターに声をかけてマイクスタンドに立つた。

同時に照明が落とされ、幕も上がってきた。

「さあ、派手にやろうぜ！」

そして、作戦が決行された。

「・・・で？天使のねぐらってどこなんだ？」

俺たち実行班はある女子寮の前に集まつた。

「音無君？見て分からぬの？”ここよ”」

ゆりが当然でしょ？と言わんばかりの顔で言った。

「こ？・・・こつて女子寮しかないぞ？」

「女子寮しか見あたらないんだけど・・・」

他の奴らも当然のような顔をしている。

「だ〜か〜ら〜・・・天使は”生徒”会長なんだから寮生活をしていて当然じゃない！」

ああ、なるほど。てっきり悪の秘密組織の研究所みたいなトコを想像しちまつた

「て、それじゃあ不法侵入じゃないか！！」

「・・・時間がないわ、みんな！行くわよ！」

ゆり達は俺の言葉にも一切聞き耳持たず女子寮に突入していった。俺？おれは松下五段に拉致られて一緒に突入する羽目に・・・当然のことながら悪趣味な罠があるわけでもなく「せいとかいちよう」と書かれたドアの前に簡単にたどり着いた。

「ちっ、鍵がかかってるわね～」

ゆりがガチャガチャとドアノブを動かす。

まあ、そりやそうだろうな・・・じゃあ、退散しようよ。

「”なら”、松下君！」

「おう」

松下五段は俺をおろすとドアノブの前にかがんで何か針金のようなものを取り出した。

おいおい・・・まさか・・・

ガチャ

ああ、やっちまつた よい子は真似しないように

「最低だお前らーちくしょう、ちよつとは良い奴らだと見直したのに！」

ドタドタドタ・・・

再び俺に構わず部屋に侵入していく。

女子寮に突つ立てたら怪しまれるので俺も泣々、あくまで泣々部屋に入った。

そこで目にしたものは・・・・・！

「 え、 うるせー。 」

順調に C r o w S o n ga が弾き終わった。

だけど予想以上に生徒の入りが悪い。

まだ体育館の三分の一程度だ。

なんで? なんで集まらないんだ?

・・・ 綾崎がいないからだろうか?

脳裏にここにいないアイツの顔が浮かび上がった。

(やつぱこの曲は最後の方が良いよね?)

(ん・・・ あえて最初にした方がいい気もするな)

(なんで? 一番迫力があるから締めには適当じゃない?)

(いやあ、これを弾いてるときギャラリーの乗りの良さが異常だからさ。 初めの方にしたらもつと集まると思つんだ)

(・・・ だけどやつぱり最後の方が良いと思つ)

(まあ、 岩沢の好きにすればいいよ。 僕はお前と演れれば十分だし)

(ー・・・ そ、 そうか?)

(どうした、 岩沢? 顔が赤いけど熱でもあるのか?)

(な、 何でもない!!)

・・・ アイツは突然恥ずかしいことを口にするのが困るんだよなあ。

確かにアイツはあの曲をギャラリーが集まるかもって言つてた。

いつもは最後の方で演る曲だけど・・・

今はアイツの言葉を信じてみよう。

私はファイードバックを始めた。

「 え・・・ 」

「 何でここで・・・? 」

「 A l c h e m y! ? 」

三人の驚いた表情も気にせず前奏を弾き始める。

ギヤラリーも早いA l c h e m yの登場に驚きと喜びの歓声を上げた。

「こ、ここは・・・」

俺が目にしたのは良く片付けられた本棚。

かわいらしき熊のぬいぐるみが置いてあるベッドのファンシーなデザインのスリッパ・・・etc

「どう見ても普通の女の子の部屋じゃないか!!」

「ここどこが天使のねぐらだ!一生徒の一般的な寮じゃないか!

「マジで最低な奴らだなお前ら!だいたい・・・!」

トン!

・・・・あ。

突然頭部に打撃をくらう俺の意識はフロードアウト。

「ありがと、松下五段」

ゆりは特に興味なさそうな顔で礼を言った。

「じゃあ、天使のデータバンクにアクセスするわよ」

そして、机にあつたデスクトップの起動スイッチを押した。

見たことあるような起動モーションをした後コーナー選択画面が現れる。

「ち、パスワードロックがかかってる・・・竹山君お願い!」

そこでゆりから竹山にバトンタッチ。

竹山は自分のパソコンとデスクトップをコードでつなぎ、いくつかのプログラムを起動した。

雨のように数列が流れたかと思つと特定の数字とアルファベットが表示された。

竹山がそれをパスワードの欄に打ち込むとようこそその文字と起動音

が流れた。

「すごいわね・・・」

竹山はさらに厳重なプログラムのロックを解除していくとゆりがある場所で反応した。

「竹山君！ちょっとそこで止めて！」

そこには天使が使う hand sonicなどの情報が映し出されていた。

「これは使えるわ・・・」

情報をスクロールしていくと見たことのない名前が出てきた。

”unison”それは他のものと比べて情報が極端に少ない。まだ未完成だということか。

「・・・なにこれ」

そこには見知った二人の名前があった。

・・・そういえば前、岩沢さんは綾崎君の記憶をビリしても戻したことば、ゆりは全てのデータを保存するように竹山に命じた。

『こちら遊佐です。綾崎さんの意識が戻つたそうです』

遊佐から無線が入ってきた。

まだ、岩沢さんは消えてしまつては困る。

「何か異常はないかしら？」

あそこに映つっていた二人の名前は・・・

『綾崎さんは記憶が戻つたと言つてましたが』

『最悪ね・・・岩沢さんには絶対に伝えては駄目よ』

綾崎紅騎と、岩沢まさみ。

『岩沢さんの強い希望でゆりさんの前に伝えましたが』

『今すぐにライブを中止しに行くわよ！』

ゆりはそう言って女子寮を飛び出した。

あのunisonに岩沢さんの名前があるって事は何かしら関係性があるところだと。

それを確かめるまでは岩沢さんに消えてもらつては困る。

『陽動班、教師達に取り押さえられました』

そして短いノイズの後に遊佐からの通信が途絶えた。

事態はさらに悪化していく。

「急がないと・・・！」

潜入作戦（後書き）

さあ、似ているよつで全く別物の展開になつてきました。
次話を楽しみに。

突然の接触（前書き）

ここがストーリーのひとつ山場です！！

突然の接触

「…………ん」

あれ……？ 何で俺保健室なんかで寝てるんだ？
…………（ぼくぼくぼくぼく）

！（チーン）

ああ、確かにさまじい頭痛の後倒れたんだつけ。
そういうえばあの夢はやっぱり俺の記憶なのか？
My Songを歌つた後俺と”岩沢さん”はどうしたんだろうか。

そこからまた思い出せない……

「あ～くそつ、情けねえな……俺……」

保健室には俺以外に一人男子生徒がいた。

名前は分からぬが戦線のメンバーの制服だ。

「……なんでここにいるんだ？」

質問してみるとえらく事務的な連絡をしてきた。

今は作戦の最中だということ、今回は結構大規模な作戦だということ。俺が目を覚まさないから陽動班は四人で出ていること。
そうか、じゃあ岩沢さんに記憶のことを報告できないな。
すると男子生徒が無線でどこかと連絡を取り始めた。

「どこと連絡してるんだ？」

「遊佐さんあなたが目を覚ましたことを伝えました」

遊佐って確か戦線のオペレーターだつて聞いたな。

「……よし。

「じゃあ、その遊佐つて人に岩沢さんに俺の記憶が戻つたことを伝えてくれないか？」

「……分かりました」

男子生徒は再度連絡を取り始めた。

さて、どうするか……

「では自分は失礼させてもらいます」

男子生徒は軽く会釈をして保健室を出て行った。
すると入れ違いに一人の少女が入ってきた。

小柄な身体に長い銀髪、不気味なほど無表情。

戦線の敵、天使だ。

「気がついたようね」

天使はベッドの横の椅子に座りながら聞いてきた。

「・・・何しに来たんだ？」

俺には天使の意図が全く読めなかつた。

俺と顔を合わせたのはまだ一回目だ。

保健室に見舞いに来てもらうほど交流はないはずだ。

「少し話しておきたいことがあって」

「話しておきたいこと?」

俺は少し身構えた。

戦線について聞かれるとしたらどこまで話すべきだろうか。

いや、それとも急いで立ち去つた方が得策なのか？

「ええ、あなた自身のことと岩沢さんのことについて

・・・・・はい?

何でそこで岩沢さんの名前が出てくるのですか？

まさか・・・ガルデモを解散させて欲しいとかか？

もしくは天使の内通者になれとかか？

「・・・スパイはお断りなんですが」

「?」

きょとんとした顔をされた。

「え?違うの?」

「・・・違うわ」

違うのか・・・

じゃあ、何だつて言つんだよ。

「あなた、生前の記憶はあるかしら?」

天使さんにまで聞かれてしまいました・・・

「覚えている事には覚えているんですけどね」

「やう・・・」

そつって・・・それだけですか？

「あの～他には聞かないんっすか？」

「じゃあ、単刀直入に聞くわ。あなた、岩沢さんとはいつから知り合いなの？」

いつから？それはたぶん生きていた頃の事を言ひてるんだろう。

「確か、十七の春頃だつたはずですね」

あの夢の内容が事実ならたぶん五月頃だな、あれは。だけど、これ以上は思い出せないんだよな・・・

「やう・・・」

すみません・・・もう少し別の反応をしてくれないと心が持ちません・・・

「岩沢さんとはどんな関係なの？」

・・・・・は？

なにそのちょっと修羅場なセリフ・・・返事によつては今こじで殺されそうになつてもおかしくないんじやないかな？

だけど、ここは正直に答えよう。

「分かりません・・・」

生きていた頃の記憶も完全には戻つてない。この世界でもちょっと交流が深い程度だし。

正直分からぬ。

「やう・・・」

「だけどただ一つ言えるのは

「・・・?」

「岩沢さんは俺が記憶を取り戻せるように精一杯頑張つてくれているということです」

現段階ではこれだけしかはつきりしていない。

だから俺の記憶が完全ではないが戻つたことをこち早く云ふたいと思つたんだ。

「分かつたわ」

天使は椅子から立ち上がった。

話す事つてこれだけなんだろうか？

何か俺だけがしゃべってた気がするんだけど。

「ん・・・・・」

「・・・・・！」

突然天使の顔が超至近距離にあった。

キスをされたつてことに気づいたのは天使が顔を離したときだつた。

「な、なんで・・・・？」

「私もあるの記憶が戻るよう協力するわ。”私なりに”」

天使は相変わらずの無表情で応えた。

「じゃあ・・・・・」

天使は立ち去つていった。

俺はしばらく呆然と一点を見つめていた。

突然の接触（後書き）

突然奏さんに唇を奪われてしまいました。
紅騎も驚くのは無理もないさ・・・（笑）

岩沢のMy Song(前書き)

二十一話で原作のまだ三話なんですね～
まあ、ここから原作とは違う方向に進む予定ですが・・・

岩沢のMy Song

何事もなく曲が弾き終わった。

早い段階からのA1chemy。

意外性もあたのか歌の中盤からは体育館を埋めつく勢いで生徒達が集まってきた。

綾崎の言うとおりだつたな・・・

突然後ろの集団が割れた。

明らかに生徒ではない、教師達だつた。

『こちら遊佐です。岩沢さん。綾崎さんが目を覚ましたそうです』
こんな状況だつてのに思わずほつとしてしまつた。

良かつた、意識が戻つたんだな・・・

「オーケー分かった。面倒なことになりそつだから退散しようと思・

・・・

『それと、綾崎さんの記憶が戻つたそうです』

「・・・・え?」

戻つた・・・?

綾崎の記憶が?

「・・・・良かつた・・・・」

「岩沢!」

突然ひさ子の声が聞こえた。

「・・・あ」

それと同時に少しの間体育館が真つ暗になつた。
教師達の仕業だろう。

気がついたら私たちは取り押さえられていた。

「…………くそ、何でこんな時に天使が現れるのよ！？！」

ゆり達実行班は体育館に向かう途中で天使と接触してしまった。

今回の天使は予想以上に反撃をしてきた。

銃で応戦すると弾切れをねらって一人ずつ仕留め、近接格闘をしても歯が立たない。

気がつくと日向、音無、ゆりの三人だけしか残っていない。

「今回の天使はいつもとなんか違うな……」

「ああ、そうだな……」

こちらの武器は拳銃と軽機関銃、いざれも残弾はマガジン一本分だけだ。

「仕方ないわ……音無君と日向君で天使を引きつけてちょうどいい

「分かった、ゆりっぺ！」

「・・・了解」

まず日向が軽機関銃を全弾たたき込む。

弾が切れると天使が真っ直ぐ突っ込んだ。

日向は天使のハンドソニックを軽機関銃で受け止める。

その横から音無が拳銃をたたき込んだ。

そして”隠し持っていた手榴弾のピンを抜いて一人の方に突進してきた”

「・・・は？」

「すまん、手榴弾の使い方が分からんんだが”起爆スイッチはどこだ？”

もちろん手榴弾に起爆スイッチはない。ピンを抜けば爆発するのだから。

「ば、馬鹿野郎ううううう！」

ドカーネン！！

「日向君、音無君……ありがと。」

ゆりは体育館に向かつて全力で走った。

「全くお前らこんな事をして許されると思つてゐるのか？」

生活指導の教師がお決まりの説教を始めた。

「食堂の件は多少は目を伏せるが今回は放つておくわけにはいかない。樂器は全部没収だ。」

教師がアコースティックギターを掴んだ。

「ふん・・・どうせ没収するんだ。」これは捨てても構わないだらう？』

突然生前の長年使っていたギターが親に叩き潰されて帰ってきた場面がよみがえった。

大人がまた私から音楽を奪つていく・・・

「・・・・・め・・・ろ」

・・・私にはもう音楽しか残つてないんだ。

「ん？何か言つたか？」

次に脳裏に映つたのはアイツと初めて会つたときの事だった。

初対面なのにも関わらずアイツはなれなれしかつた。

・・・・けど、誰よりも真つ直ぐで、強くて、誰よりも優しい目をしていた。

(これがお前の生きる意味だ！好きなんだろう！？大好きなんだろう！？ギターが！音楽が！)

私に道を指し示してくれた頼もしいアイツ。

(だつたら生きてる意味なんて無いとか言うな！悲しかつたら泣けばいいだろ！泣かない奴が正しいなんていつ誰が決めたんだよ！)生きる意味を失いかけていた私を救つてくれたアイツ。

(・・・これが俺の歌(My Song)だ)

そう言つて演奏する姿はまぶしいほどに輝いていた。

「それに・・・触るなああああああ！」

私は教師の手からギターを奪い返して肩にかけた。

一瞬の混乱に乗じてひさ子も教師の手から抜け出しそうやつに向かつて走った。

「何をしてるんだ！おとなしく渡せ！」

教師の言葉はもう耳には届かない。

代わりにアイツの歌が頭の中を支配していた。

・・・このギターもアイツに助けられたんだ。
雨で痛んだこのギターを寝る間も惜しんで見違えるように直してくれたのもアイツだった。

ちょっと憎らしいトコもあるけど世話好きで、不器用だけど手先は器用で。

それによりもアイツの歌を一番近くで聴いていたのが最高に幸せで。

・・・ああ、なんだ。

私、アイツのことが好きなのか・・・
ただ、それだけのことだったんだ。

きつとひさ子は音源を全校のスピーカーにつなげたんだろう。

・・・もちろん保健室にも。

（）

広い体育館に私の音楽だけが響いた。

綾崎・・・これが私のMy Songだ。

（）

保健室のスピーカーから懐かしい曲が流れてきた。

「岩沢さん・・・？」

（）

いきなりスピーカーで流すなんて何があつたんだらうか……

・・・ちょっと待て。

「これ俺の曲と少し違うぞ・・・

『苟立ちをどこにぶつかるか・・・』

歌詞も違うよ！？

「アレンジー？アレンジだよね！？」

だけど原曲がなんなのか岩沢さんは言わなかつた。

「くつそーーー一発がつんと言つてやる！－！」

俺は保健室を飛び出した。

田向君達のおかげで何とか体育館に着くことができた。早くライブを中止にしないと。

・・・あれ？

教師がステージにいるつて事はすでに中止になつてる？

体育館に入つてみると岩沢さんが一人で歌つていた。しかもいつものような口調ではなくバラードだ。

「・・・良い歌ね」

熱心に歌つている岩沢さんはとても良い表情をしていた。

まるで何か納得をしたような・・・

「いけない！一刻も早く岩沢さんを止めないと－！」

どん！

「うわっ

「きやつ・・・つひ、綾崎君！？」

なんで彼がここに？保健室にいたんじや・・・

「「めん、俺ちょっと岩沢さんにがつんと言わないとい－！」

「な、何を言つて・・・つて待ちなさいよ！」

俺はゆりの言葉を無視して生徒を押しのけてステージに向かった。

「その曲待つたあああああ！」

「／＼・・・ピタ

「・・・・え？ あ、綾崎？」

突然の事に岩沢さんは歌を止めた。

「岩沢さん！－なんだよ！－それは俺の歌だよ！－使うなら歌う前に言えつてんだよ！－パクリになっちゃうだろ！－！」

「あ、・・・・え？ いや・・・そんなつもりは・・・その・・・バゴオ！」

「ぐおおおおお！」

後ろから盛大にドロップキックをかまされた。

振り返るとひさ子が拳をパキポキさせているところだった。

「いきなり復活したと思ったら何を言つてんだボケエエエエ！」

「ひいいいい！！」

暴力反対！－ミンナトモダチ・ブタナイデ！－

「ひさ子・・・ちょっと待つてくれないか？」

岩沢さんはひさ子を止めて俺に手を差し出してきた。

「・・・・ん」

「お、おう・・・」

岩沢さんの手を掴んで立ち上がった。

「・・・・で？ これは何の真似だ綾崎？」

『ゴゴゴゴゴゴゴゴ・・・・

見える・・・今岩沢さんの背後に怒りのオーラが立ちこめているよ・・・

「あの・・・その歌はですね～俺が作った歌であつて・・・
「知つてゐる・・・だからお前に聞いて欲しかったんだ。私のM.Y
Song・・・」

岩沢さんは少し頬を赤らめる。

怒りのオーラも弱くなつた。

「た、確かにあのとき俺は”岩沢さん”に・・・・・

ドム・・・・・！――！

「が、がは・・・・・」

岩沢さんの渾身の右ストーレートを食らい俺の身体は優に5メートルは飛んだ。

「ふ、ふん！自業自得だ！」

殴つた本人が言わないのでください・・・・・

目覚めたばかりの俺は再び意識を失うのであつた。

岩沢のMy Son(後書き)

岩沢さんが消えないだと！？

いろいろな方法を試みましたが、やつぱりこれは紅騎君がいいと思
いました（笑）

例のunionの正体は・・・まあ、まだ未定です orz
では次話を楽しみにノシ

再びの保健室（前書き）

「じいからです！」

物語は「じいからですよ～

・・・・と一一十一話で叫んでみる。

再びの保健室

俺は再び保健室で目を覚ました。

すでに日は傾いていて保健室も薄暗くなっている。

「・・・結局こうなつたか」

岩沢さんに殴られた当たりの所をわざとまだズキズキする。

「痛てて・・・」

ガラガラガラ・・・

「あ・・・」

「・・・」

岩沢さんが申し訳なさそうな顔で入ってきた。

「あー・・・気分はどうだ? 綾崎。」

本当はまだ痛むのだが我慢できる範囲なので「まかしておいで。

「まあ、大丈夫だと思う・・・」

「そ、そうか・・・」

岩沢さんは戸惑いながらも椅子に座った。

ゴト・・・

なぜかギターも持つてきただし。

「遊佐のおかげでな、楽器を取られずに済んだんだ」

どんな手を使つたんだろう?

教師達を黙らせるためには相当な弱みが必要なはずだが。

「アソツはすこいな・・・教師達全員の弱みを握つていてな。おかげでライブも黙認されるようになつた」

遊佐がこちらの身方で良かつた・・・

「・・・で、なんでギターを持ってきたんだ?」

俺はアコースティックギターの方を指さした。

「・・・覚えがないのか?」

岩沢さんはギターを手に持つて俺がよく見えるような高さに持つて
きた。

よく手入れされているがそれ以外なにもピンとはこない。

「じめん・・・全く・・・」

やつぱり俺と関係があるのだろうか？

「・・・そう・・・か・・・」

岩沢さんはギターをまた壁に立て掛けた。

ギターといえば一つ謎のギターがあつたつけ。

俺が使つているギターの他にもう一つ部屋にしまつてあるギターがある。

俺のギターと正反対のレッドサンバーストのストラトキャスター。あれも何か関係があるのでだろうか？

「・・・あの・・・」

ハモった。うん、今完璧に岩沢さんとハモってしまった。

「あ、綾崎から・・・」

「いやいや、岩沢さんからビリビリ

「そ、そつか・・・」

ふ〜・・・なぜこんなに緊張するんだ？

落ち着け落ち着け落ち着け・・・

・・・・・。

よし、落ち着いた。

「あ、あの・・・だな・・・綾崎」

じいいいい・・・

見過ぎ！岩沢さん見過ぎですよー俺の身体に穴が空きつつですー！

「は、はい・・・」

「お、お前の記憶が戻つたって聞いたんだけど・・・ビのへりこ戻つたんだ？」

「のくらい・・・か。

よく考えてみるとそれほど戻っていないんだよな・・・

”あの時”見たのは岩沢さんと思われる女の子の前で歌つたところだけだし・・・

「そんなには思い出してなんですけど・・・

「分かつたことだけでも良い。話してくれ！」

「……分かりました」

そして俺はあの時見た事を細かく話した。
公園である女子に会ったこと。

女子に口うるさく説教をしたこと。

My Songを歌つたこと。

「俺が思い出したのはここまでです。」

「……」

岩沢さんはずっと黙つて俺の話を聞いていた。

「やっぱりあのときの女の子って岩沢さんだよね？」

「クリ……」

無言で首を縦に振つた。

やっぱりそうか……だからMy Songを知つていたのか。

「それで良く記憶が戻つたなんて言えたな

グサリ。

「すみません……これじゃあ”戻つた”じゃなくて”思い出しだ”ですね」

何で俺はあの時戻つたって言つたんだろうな。

「全くだ。何ならもう一回押し倒してやろうか？」

岩沢さんがいたずらっ子のような笑みを向けてきた。

「たぶん……もうあの時みたいに倒れないと思いますよ？」

「……なんで？」

そう確信できるのには訳がある。

たぶん同じ事をしても戻らないのだろう。

現にCrown Songで少し記憶が戻つたが、一回田からは全く記憶がよみがえる感じはなかつた。

「同じ事をしても効果がないんじゃないかな、たぶん

「よし！」

「がばあ！」

「うわ……」

いきなり俺の上に覆い被さってきた。

「い、岩沢さん！！なにやつてんですか！」

俺は岩沢さんの肩を掴んで元の場所に座らせた。

「お～本当だ。全然平気じやないか」

それだけのために乗つかつてきたんですか・・・アンタ・・・

「ああ！そようだそようだ！こつちからも聞いておきたいことがあつたんだ」

俺は無理矢理話をそらした。

そうでもしないと何かこう・・・駄目な気がしたからだ。

「何？スリーサイズ？・・・いて！」

俺は軽く岩沢さんの脳天に手刀をきました

「そうじやなくて、ギターの話です」

「ちえ～な～んだ」

岩沢さんってこんなキャラだっけ？

「岩沢さんって生きてた頃、どんなギターを使ってた？」

「ん～」

ちょっとすねたように壁に立て掛けたあるギターを指さした。

「エレキギターは弾いてなかつたの？」

「うん・・・ああ、だけど触つたことはあるよ」

「そうか・・・じゃあ、あのギターは何なんだろう？」
う～ん・・・謎だ。

「ちょっとそのギター触させてくれる？」

俺は岩沢さんのアコースティックギターを持ってみた。

やつぱり丁寧に手入れがされている。

「だけど何だらう・・・初めて持つた気がしないんだよなあ。

ちょっと弦をはじいてみる。

(・・・どうしよう、スチールの弦がない・・・)

(どうしたの？綾崎？)

(いや、フォークギターって弦がスチール製なんだぜ。そのスチール製の弦が無いんだよ
(私は気にしないけど?)

(・・・本當か?)

(だつてあんなぼろぼろのギターがここまで綺麗になつたんだもん
それ以上望んだら綾崎に悪いでしょ?)

(・・・分かつた。別の弦を探してみる)

(本当にありがとな・・・もう一度私が音楽をやれるようにしてく
れて)

(はつはつは〜この貸しはでかいぞ〜)

(うん!一生かけて返すから!~)

(一生で・・・)

(・・・だめ?)

(一生つて・・・一生だぞ?)

(うん・・・一生)

(・・・まあ、がんばれ)

(うん~)

「どうしたんだ?綾崎?」

「・・・」

「どうか・・・これは俺が直したものだったのか。

音楽を失つた女の子にもう一度音楽をやつてもらつたために。

「本当に一生かけて返してくれるのか?」

「・・・あ、綾崎・・・」

「また・・・ちょっとだけ思い出したよ。このギター、俺が直した
んだろう?..」

ギターを若沢さんに返した。

岩沢さんはそれを大事そつにギュッと抱きしめた。

「ああ、一生かけて返してやる」

「馬鹿だな、俺たちもつ死んでるだろ?」

もう一生は終わってる。だから・・・

「だったらこの世界で返してやる!」

そこまでしてこだわるのか、この人は。

「この世界って不老不死って聞いたんだけど・・・」

「そんなの問題じゃない! 私が返すついにしたら返すんだ!」

「なんで今までしてこだわるんだ? たかがギターを直しただけじゃないか。」

そんなんで借りつて言つたら貸しだらけになっちゃうぞ?

「たかがじゃない! だって私は・・・」

「私は?」

「な、何でもない! とにかく返すつて言つたら返す・・・」

・・・負けました。

こつまでしてこだわる理由は分からぬが貸しこじておこい。

どうやつたら返すことになるのか分からんが。

「・・・まあ、頑張れ」

その夜、死んだ世界戦線は作戦失敗の反省会ならぬ飲み会をすることになった。

岩沢さんがまた奈良漬を食べたのは言つまでもない。
しかし今回は岩沢さんの介抱をしなくて済んだ。

・・・良かつた。

再びの保健室（後書き）

はい、これで岩沢さんが消えないよう伏線を引くことができました。
物語はここからあらぬ方向へ進んでいく予定です。
ではまた次話を楽しみに〜！！！

ちよつとした事件（前書き）

一つの山も無事越えたのでおまけストーリー的な話になっています。

ちょっとした事件

何かと大波乱だつたらしい潜入作戦が終わつた次の日。

・・・・・ 岩沢さんが風邪を引いたらしい。

あの打ち上げの後布団に入らず床で寝てしまつたそつだ。

翌日ひさ子が床で文字通り死にかけていた岩沢さんを発見。保健室に搬送したそつだ。

「・・・・・ 死んだ世界でも風邪は引くんだな」

岩沢さんは息を切らしながらつぶやいていた。

死なないだけで他は普通の身体なんですよ、岩沢さん・・・

「まあ、ただの風邪だから一、二日自分の部屋でおとなしくしてなさい」

保健の先生の言葉だ。

ちなみに保健の先生は俺たちのような授業にもろくに出ないで騒ぎぱっかり起こす。

言いつよつては不良の俺たちにも分け隔て無く接していく。

「それと今後は絶対に奈良漬けを食べさせない」とー・

「できるだけ努力します・・・・

と言つわけで岩沢さんを再び寮に運ばなければならぬのだが。

・・・・・ ひさ子がいない。

「・・・・・ ひさ子がいるよな?」

廊下を見渡してもひさ子どころか戦線メンバーも全く姿が見えない。

・・・・・ 仕方ない、俺が運ぶしかないのか。

「ありがとうございました。岩沢さんは俺が運んでいきますんで。

「ああ、そう? じゃあ、お願ひね」

じゃあ、どう運んだ方が良いんだね? ・・・

とりあえず岩沢さんが横になつているベッドの方へ行く。

「ゼー・・・・・ ゼー・・・・・

ん~・・・・・ これは岩沢さんに負担をかけさせない運び方を考えない

とな・・・

「あの・・・・・病人を運ぶときおんぶじや駄目ですよね？」

「風邪の程度によるけど岩沢さんの場合は駄目ね～」

やつぱりそうか・・・・じやあ、どうすれば良いんだろ？

岩沢さんに負担をかけなくて、なおかつ運びやすい持ち方・・・

・・・・・・・・

あれしかいか・・・・。

「岩沢さん・・・・ちょっと失礼」

俺は岩沢さんの両腕を俺の首に回させる。

それから岩沢さんの膝と肩に俺の腕を入れて持ち上げる。

いわゆる”お姫様だっこ”だ

「あ、ああ、あ、綾崎！？」

岩沢さんはかなり驚いた顔をしている。

顔が赤いのは熱からなのか、または恥ずかしいからなのかはよく分からぬ。

「じゃあ、お世話になりました～」

「お大事に～（笑）」

（笑）が気になつたが今は岩沢さんを運ぶことが最優先だ。

「綾崎・・・・なんでこんな事になつてるんだ？・・・・背負えばいいのに」

「なんでつて、岩沢さんに負担はかけられないし、運びやすいからだけど・・・・もしかして嫌？」

岩沢さんはブンブンブンと勢いよく首を横に振つた。

大丈夫かなあ・・・・余計な体力使つて・・・

「・・・・重くないか？」

「全然、ぜんぜん重くない・むしろ軽い！」

「そ、そう・・・・か・・・？」

突然岩沢さんはしゃべらなくなつた。

ただし寝ているわけでもなく黙つてじつと俺の顔を見つめている。

岩沢さんに腕を回してもうひとつでその分お互この顔がもの凄く近いところにある。

・・・振り向いたら接触してしまってさう！」

「綾崎・・・・・」

「な、何でしようか？」

岩沢さん・・・絶対分かつてゐるよな・・・。

・・・・・分かつて耳元で囁いてるんですね。

「・・・・なぜこつちを見てしゃべらない？」

ちくしょー・・・・これは絶対分かつてゐるな・・・もつ確信した。

俺もちよつと悪戯してやろうと思ふ俺の左腕、岩沢さんの膝を抱えている腕の力を少し抜いた。

すると少しだけ岩沢さんはその場で一瞬浮遊した。

ふわ・・・・

「わわわ・・・！」

そしてすぐにまた腕の力を入れる。

「ほり、岩沢さんが悪戯するから

「・・・・・・ばか」

前にも言つたけどちよつとすねた岩沢さんの上田遣いは反則級のかわいさだ。

今回は風邪で弱々しくなった事が追加されてさらバワーアップしている。

「・・・綾崎？顔が赤いぞ？」

「・・・・・岩沢さんがかわいすぎるからな

「な・・・・・！」

それつきり岩沢さんは一言も言葉を発しなかった。

顔もそらしたけど時々ちよつと見るのは勘弁してください・・・逆に緊張するから！

「はい、着きました～・・・」

「・・・」

岩沢さんはポケットから鍵を取り出してお姫様だっこ状態でドアの鍵を開けた。

ガチャ・・・・・

「・・・・・ん」

入れろって事らしい。

俺は岩沢さんの部屋に上がった。（岩沢さんはだっこ状態からいつの間にか靴を脱いでいた）

とりあえずベッドに寝かせる。

おでこに触れた後、首筋も触つて熱の具合を確認した。

・・・まだ熱はあるな。

「とりあえず水分買って来るから、その間に着替えといてくれよ

「・・・・分かった」

俺は急いで購買に向かった。

なぜ購買かつて？

岩沢さんの冷蔵庫にはどうせミネラルウォーターしか入っていないからだよ。

ついでに熱冷ましのシートも売つてると良いなあ・・・

じょとしした事件（後書き）

次話も続きますよ～
お楽しみに。

ちょっとした事件～岩沢視点～（前書き）

それではどうぞ

ちよつとした事件／岩沢視点

・・・・朝だ。

何で私は床で寝ているんだ？

・・・思い出せない。

まあ、とりあえず朝メシを食わないと。

「・・・・あれ？」

起きあがろうとしても腕に力が入らない。

・・・・どうしたんだろ。

タツタツタツタ・・・・パン！

「お～い、岩沢～朝食にしよう・・・・つて、岩沢！？」

「ひさ子・・・ノックをしてから入れとあれ程・・・」

「そんなことよりお前もの凄い熱だぞ！風邪でも引いたのか！？」

ああ、だからさつきからこんなに身体がだるいのか。

「・・・・そうみたい」

「・・・・つたくちよつと待つてろ！」

そう言つてひさ子は入江と関根を呼び出して三人がかりで私を保健室に運んだ。

・・・・そんなに私つて重かつたのか？

ちよつとショックだつた。

「・・・・・風邪ね」

保健室に連れてこられた瞬間に即答された。

「・・・・何か心当たりは？」

私は口を動かす気力もなく、ひさ子が代わりに話した。

「・・・・事情は分かつたわ、とりあえず岩沢さんはここで休んでなさい。」

私は保健室のベッドに寝かされた。

「ほら、あなた達も授業が始まる時間でしょ。行つた行つた！」
ひさ子達は面倒臭そうに保健室から出て行った。

どうせ行き先は講義室だろうけど。

「ふ〜・・・・・じゃあ、何かあつたらいつでも言いなさいね
そう言つて保健の教師は事務仕事に戻つた。

・・・・・寝るかな。

私はまぶたを閉じた。

それから眠るまで5分もかからなかつた。

次に起きた時にはもう放課の時間だつた。

・・・・・寝過ぎたかな？

「・・・・・さんが風邪つて本当ですか！？」

あの聞き覚えのある声は・・・

「本当よ、まあ、一・二・三日自分の部屋で大人しくしていれば大丈夫
よ」

「良かつた〜」

・・・間違いない、綾崎だ。

あの様子だと私が保健室にいると聞いてすぐにやつて来たんだろう。
「じゃあ、若沢さんは俺が運んでいきますんで」

「ああ、そう？・・・じゃあ、頼むわね」

・・・！、綾崎が運ぶ！？私を！？

その瞬間綾崎が私を背負つて光景が頭の中に映し出された。

・・・・・それも良いかも知れないな。

だけど、私は三人がかりで運ばれてきたんだぞ？

綾崎一人で私を運べるわけ・・・・

・・・よつ・・・・と

突然私の身体が浮いた。

綾崎私をお姫様だつこしていのに気が付くまで数分かかった。

「あ、ああ、あ、綾崎！…？」

「じゃあ、お世話になりました～」

「お大事に～（笑）」

綾崎が私を背負つている想像しかしてなかつたのでこれは不意打ちだった。

「綾崎・・・なんでこんな事になつてゐんだ？・・・背負えばいいのに」

そうだ、背負えば綾崎も楽なはずなのに・・・ビリして・・・

「なんでつて、若沢さんに負担はかけられないし、運びやすいからだけど・・・もしかして嫌？」

嫌なわけがない。

・・・だつてこんなにもお互ひの顔が近いんだから。
だけど、一つだけ気になることがある。

「・・・重くないか？」

「全然、ぜんぜん重くない！むしろ軽い！」

即答されてしまった。

・・・綾崎なりに気を遣つてくれてるのかな？
それはそれで嬉しいけど、何かヤだな・・・

「そ、そう・・・か・・・？」

・・・よし、ちょっと悪戯してやるか。

私は少し腕の力を入れて綾崎と私の顔の距離を縮めた。

・・・これ、すぐじドキドキするな・・・

でも、これは綾崎悪戯するためなんだからな！

別に私がしたくてやつてるんじゃないと言ひ聞かせ、さらに距離を縮めた。

・・・綾崎が振り返ればお互ひの距離がゼロになつてしまつほどに。

・・・それつて・・・
つ、つまり・・・

とたんに心臓の動きが速くなつた。

あ～もう！

なんで私だけこんなにドキドキしなくちゃいけないんだ！

私は悪戯を続行した。

「綾崎・・・」

耳元でささやいてみた。

おお、ビクつしてした・・・。

なかなかおもしろいな

「な、何でしようか？」

「・・・・なぜこっちを見てしゃべらない？」

こっちに振り向いたら私とお前は・・・・

・・・距離がゼロになつて・・・

つ、つつ、つまり・・・・私と綾崎の・・・

く、唇と唇が・・・・

フワッ・・・・

え？

突然私の身体が中を浮いた。

一瞬バランスを崩して頭の中が真っ白になつた。

「わわわ・・・！」

一瞬パニックになつたとき、私の身体がもう一度綾崎の腕の中に収まつた。

「ほら、岩沢さんが悪戯するから」

・・・・ばれたか。

それにしてもずいぶん軽々と私を受け止めたな。

重くなつて言いたかったんだろうか・・・

ま、まあ、それなら許してやっても良いか。

・・・・！

よ、良くない良くない・・・。

だつて、あのまま綾崎が振り向いてくれていたら・・・。

振り向いていてくれたら・・・。

あ～もう・・・綾崎の・・・

綾崎の・・・

「・・・・・・・・ばか」

すると綾崎の顔がさつきよりもどんどん赤くなつていつた。

・・・・・どうしたんだろう?

「・・・・綾崎?顔が赤いぞ?」

私の風邪が伝染つたのかな?

「・・・・・・・・岩沢さんがかわいすぎるからな」

「な・・・・・!」

か、かわいい・・・・?

・・・・・私が?

そ、そんなこと無いだろう・・・

・・・・・・・・・・・・・・・

かわいいなんて言わたることが無かつたなあ。

いつも男らしいとか、ぶっきらぼうとか、我が道を進んでいると
かしか言われてないからな。

・・・・・・・・・・・・・・

だつて悔しいじゃないか。

風邪の時の私がかわいいなんて・・・

「はい、着きました」・・・・

私がそんなことを考へている間に一つの間にか部屋の前に着いてしまつた。

私はポケットから鍵を取り出して鍵を開けた。

ガチャ・・・・・キイイ・・・・。

「・・・・・ん」

綾崎は、私をベッドに寝かせた。

そしておでこや首筋を触ってきた。

たぶん体温をチェックしてるんだろう。少し冷たい手が気持ちいい。

「とりあえず水分買つて来るから、その間に着替えといてくれよ

「・・・・分かつた」

綾崎が部屋から出た後すぐにベッドの引き出しからパジャマを取り出して着替えた。

それからしばらくベッドに横になっていた。

・・・・・う言えれば私、こんな感じで死ぬまでベッドにいたんだっけ。何も言葉を発することもできず、身体も動かせず、ただずっと死ぬまで横になっていた。

今の私もまたも身を動かすことができない・・・。

「・・・・・・れか・・・・・」

言ひようもない恐怖が私を襲つた。

そのせいいか声が上手く出ない。

声が出ないことから、さらに恐怖が増していく。
誰か・・・・誰か来て・・・・一人は嫌だ・・・。
私を置いていかないで・・・・・。
早く来て・・・綾崎・・・。

ちょっとした事件～岩沢視点～（後書き）

これで大体90%ほど"トレ"だと思います。
次回でこの回は終局です。
お楽しみに！！

じゅうじつした事件～終局～（前編や）

それでせんぐわー

ちよつとした事件～終局～

購買で買い物を済ませた俺は若沢さんの部屋に急いだ。

結局熱冷まし用のシートは売つていなかつたので、食堂で氷を分けてもらつた。

「お～綾崎！ ちよつと良こトコヒ」

突然日向に呼び止められた。

なぜか日向は弓道部の格好をしてゐる。

「今ゆりつペに用事を頼まれてな・・・・・」

「スマン。ちよつと手が離せない用があるんだ。大変だらうけどお前一人で頑張れ。」

そう言つて俺は日向に背を向けて走り出した。

「あ、おい！ 綾崎～そりや無いぜ～三百メートル先のリンクを射抜ければ食券5割り増しなんだぜ～」

・・・・それは絶対に無理だろ。

「ただし三本全てミスつたら食券全て取り上げなんだよ～」

・・・・良かつた、断つて。

しかし日向よ、突つ立つて叫んでないで早くゆりの所に行つた方が良いだろ。

「あ、いたいた！ 日向ぐ～ん！ 早く来なさいよ～！」

「ちよ、ちよつとゆりつペ！ なんでそんなもの・・・・・・ぎやあああああ～！」

背中でチョーンソーの駆動音を受け止めつつも俺は若沢さんの部屋に向かつた。

・・・・済まぬ日向・・・俺は行くべきといふがあるのだ～～

「ちよ、マジで勘弁！～だから反省してるつて～～あ、ヤメテ～～ソコハダメヒエヒヒ」

突然曲がり角から生徒会長・・・もとい天使が現れた。

「・・・・・・・・」

「うわ！？」

とりあえず接触は免れたが俺の手からア エリアスやポラ スウェ ツト、氷が入ったビニール袋が落ちてしまった。

「はい」

・・・・・ようには見えたが天使が一瞬のうちに”場所ごと移動して”袋を持つていた。

天使の技の一つ、D e l a yだ。

「す、すまない・・・」

天使は相変わらずの無表情だ。

・・・・笑つたりするんだろうか。

・・・・誰か風邪でも引いたの？」

まあ、さすがに分かるよな。

「ああ、ちょっと岩沢さんがな・・・」

「岩沢さん・・・」

じ―――。

・・・・なぜこちらをじっと見つめる？

「あの・・・何か？」

「女子寮に入るつもり？」

・・・ああ、あなたは生徒会長さんでしたね。

「もちろんそのつもりだが・・・」

じゃないとこれを持って行けないだろう。

「私が許すと思う？」

くそ・・・最悪だ・・・

今俺は武器などを一切持っていない。

いつもなら携帯しているが、岩沢さんの部屋に置いてしまった。

「それでも俺は行かせてもらひ。岩沢さんが大変なんだよ……」
ちょっと触つただけでも熱があるって分かるんだ。

岩沢さんは相当つらいはずだ。

「どうしても？」

「どうしてもだ！！」

「こうなつたらどんな手を使つても押し通るしか無いみたいだな。

「…………分かつたわ」

「くつそおおお！！やつてやる！！…………つて、はい

?ワカツタ？」

ワカツタつて分かつたで良いんだよな？

「…………良いのか？」

「ええ、生徒が病氣で看病が必要なのでしょ」

・・・・・助かつた。

これで安心して岩沢さんの所に行ける。

「ただし・・・条件があるわ」

「…………条件？」

「岩沢さんの体調が良くなつたら私の部屋に”一人”で来なさい。

午後の五時からならいつでもいるわ」

「それが条件か？」

「ええ・・・」

天使、つまり俺たちの敵のテリトリーに来いつて事は何かしら危険
があるつて事か。

・・・・・だけど、自分の心配よりはまずは岩沢さんの身体が心配だ。

「分かつた。お前の部屋はどこにある？」

「あそこの寮の最上階で一番奥の部屋よ」

天使は生徒会女子寮の方向を指さした。

「オーケー・・・ありがとな！天使！！」

「…………私は天使じゃないわ」

俺は天使の言葉を気にせず再び走った。

天使が口元をほんのわずかに膨らませているのにも気づかず。

「はあ・・・・はあ・・・・・・はあ・・・・」

久しぶりに全力で走ったな・・・おかげで氷もあまり溶けてない。

ガチャ・・・・・

「岩沢や・・・・・」

瞬間、俺の時間が止まつたような気がした。

「あ・・・・綾・・崎・・・・・・」

岩沢さんが泣いていた。大粒の涙を流しながら・・・

「岩沢・・・・・さん・・・・・?」

ひとまず俺は近場にあつたハンドタオルを岩沢さんに渡した。

「怖かつた・・・本当に・・・一人が・・・・・怖かつたんだ・・・・・」

「前に岩沢さんはこう言つていた。

たつた一人で誰にも相手にされず、何も話せず動かせず、ただずつと死を待つだけだった。

今の岩沢さんは少なからず同じような状況になつている。

そのせいでフラッシュバックしたのか・・・・・。

岩沢さんが死ぬ直前の期間。

岩沢さんの全てを奪われた絶望の時間。

「大丈夫だよ・・・岩沢さん・・・・」

俺は岩沢さんの頭をそつと撫でた。

「死ぬ直前の時誰にも相手にされなかつたとしてもこの世界では違う」

大体の記憶が戻りつつあるのに、岩沢さんが倒れたといつ記憶が全くよみがえつてこない。

思い出せるのは岩沢さんが死んだと俺に告げる医者の顔だけ。

それはつまり、俺は生きていた世界で岩沢さんの見舞いに一度も行かなかつたことになる。

最悪、倒れたことも知らずに時を過ぎしていいたと言えるだろ？

それが分かつたとき俺は、とても自分を恨んだ。

なぜ一度でも岩沢さんに顔を合わせに行かなかつたんだ？

今すぐにでも灯火が消えてしまいそうな彼女を・・・・

「生きていた世界で看れなかつた分、俺が着きつきりで看病しますから」

「綾崎・・・・・」

「大丈夫です！生徒会長公認の看病ですから！」

・・・・・どつかといふと交換条件で、ですけど。

「お前に伝染つたらどうするんだ？」

「だつたら思い切り伝染してください。それで岩沢さんが治るなら実際その方が嬉しい氣もする。

岩沢さんは一秒でも早く元気になつて、また音楽をやつて欲しい。

「・・・・・ばか」

それから一日後、岩沢さんは再び元気を取り戻した。

・・・・・俺？

たぶん大丈b・・・・・ベックションー！

あれ～・・・・？

じゅうじつした事件～終局～（後編）

次回は天使さんの部屋に御呼ばれねてしまこます。
果たしてどうなるのや？・・・ドキドキ。

天使からの事実（前書き）

それではどうぞ～

天使からの事実

「岩沢さんが回復したらあなた一人で私の部屋に来て
そんなようなことを確かに天使は言っていた。

幸い俺の風邪は岩沢さんほど酷くはないようで、歩き回っていても
さほど辛くはない。

岩沢さんが回復し、いつも通りに練習をした後、適当に用事と書いて
て俺は天使の部屋に向かった。

生徒会用の寮は一般生徒の寮よりも少し優遇されているらしい。
例えば学食が寮の中で食べられたり購買が設置してあつたり、学校
が近かつたりだ。

だけど見た目はあまり代わりはないみたいだ。

玄関の寮内見取り図を見てみると最上階に生徒会長と書かれた部屋
があつた。

時間は午後5時半、比較的に生徒の多くはまだ学校に残っている時
間だ。

俺はエレベーターを使って最上階へ、少し警戒はしたが罠の類は無
く簡単に「せいとかいちょう」と書かれた部屋にたどり着いた。
とりあえずノックをしてみた。

コンコン・・・

トツトツトツト・・・

ガチャ、キイ・・・

「入つて」

天使は言つていたとおり五時には自分の部屋に戻つていた。

「お、お邪魔します・・・」

天使の部屋は・・まあ、何といふか普通の女の子の部屋だつた。
ベッドに上には熊のぬいぐるみがあつたり、マグカップは花柄だつ
たりと意外とファンシーだ。

「・・・? どうしたの? きょろきょろして・・・」

「ああ、いや、何でもない……」

俺は天使にソファに座るように促された。

・・・・・ピンク色のソファ《二人用》で座り心地抜群だった。

「……どうぞ」

天使は湯飲みに入れたお茶を出してきた。

・・・・普通だ。

「ど、どうも……」

天使はなぜか俺の隣に座つてきた。

相向かいにもソファがあるのにだ。

俺は自然と天使の口元に目が移つた。

そう言えば俺、天使にキスされたんだっけ……
とたんに何か恥ずかしくなつてきた。

と、とりあえず本題に行かなくちゃ。

「……あの、天使さん？」

「私は天使じゃないわ」

はつきりと即答されてしまった。

天使じゃないって……じゃあ本名でもあるのかな？

「立華かなで……」

「……？」

「……それが私の名前」

立華かなで……ね。

話がややこしくなりそうだから今回は立華って呼ぶことにするか。

「それじゃあ、立華。なんで俺をここに呼んだんだ？」

隣に座つてきたことはあって聞かないでおこう。

「前にも聞いた気がすると思うけどあなた、岩沢さんの事どう思つてるの？」

・・・・またその質問か。

あの時は確か分からなかったって言つた気がするな。

・・・・じゃあ、今はどうなんだ？

ある程度の記憶が戻り始めた今の段階で、俺は岩沢さんのことなどを思つているのか？

「・・・・・ベストパートナー・・・かな？」

「・・・どういう意味？」

「そのまんまの意味だよ、話しても話題が合つし味の好みもほとんど一緒。それに一緒に歌つて気持ち良いしな。」

バンドでも、そのほかの時でも気が合つ相手、それってベストパートナーと呼んでも良いんじやないか？

「・・・とんだ唐変木ね」

唐変木？俺が？何で？

「それこそどうこう意味だよ」

「そのままの意味よ・・・」

分からんな・・・」の子の言ひ方」とは。

「あなた・・・」の世界を救う気はある？」

「・・・はい？」

「・・・」の世界を救う気はある？」

一度同じ事を言つてきた。

この世界を救う・・・全く意味が分からない。

「救うつてお前は天使じゃないのか？」この世界を作つた誰かとつながつてゐつて俺たちは信じているんだが

「私は天使じゃない・・・ただの人よ」

ただの人が剣を生やしたり銃弾を跳ね返したりできるはずが無いんだけどな・・・

「Hand Sonic」

突然天使は立ち上がりつて例の生える剣を出現させた。

「お、おい・・・危ねえ！？」

「これらはあなた達が持つてゐる武器と同じ方法で作られたもの・・・

・」

そう言つて天使はパソコンを起動させてある画面を見せてきた。
そこにはHand Sonicの細かな情報が書かれていた。

もちろん、製造方法も。

「……本当に天使じゃなかつたのか」「……ようやく分かつてくれた?」

天使は再び俺の隣に座つた。

「……気にしない、気にしない。」

「じゃあ、世界を救うつてのは?」

「今は話さないわ……」

「……今更もつたいぶつてくるか。」

「……だけど”あなただけ”で世界を救う訳じやないわ」「みんなで力を合わせてつて訳じやなさうだな……。」

「……岩沢さんか?」

「……ええ」

だと思つた……。

そうじやないと俺と岩沢さんの関係をいつもしつこく聞いてこないもんな。

「IJの世界を救うためには岩沢さんとあなたの”歌”が必要なの」「……歌ねえ」

「それも完璧に同調した声の……よ」

完璧に同調……それつて今じや不十分つて事か。

「完璧に同調つてかなり難しくないか?」

「できるわ」

断言してきた。

何か根拠でもあるのかな?

「一番大切なのは二人の心と体がぴったり合われる」と……「それが一番難しいんだよ……」

「身体の方……つまり、息はすでに完璧な領域までに達しているわ。」

おお、生徒会長さんからほめられちゃつたよ。

「……だけど、心の方は全然駄目ね」「……悪かったな。」

「うせ俺は不器用ですよ……。

「……具体的な対策方法は?」

「まずは岩沢さんとあなたの心の隔たりを取り除いて」

「……心の隔たり。」

もちろん記憶を完全に取り戻すことも入るんだろうな……。

「それから、あなた達が満足するまで一緒にいること」

「ちょっと待て、それって俺たちが消えてしまうんじゃないかな?」

「大丈夫よ……少なくとも岩沢さんは……」

「……どういう事だ?」

天使はポケットから小型のエコレコーダーを取り出した。

「何すか? ……それ」

「・・・・・」

力チツ・・・

躊躇無く再生ボタンを押した。

『すー・・・すー・・・ん・・・はあ・・・すー・・・すー・・・』

まず初めにかすかな寝息と聞き覚えのある声が聞こえてきた。

ちょ、ちょっと待て!…これって・・・

『んん・・・紅・・・騎・・・』

間違いない、岩沢さんの声だ。

「お前!…何やつてんだ!人としてどうなんだよ!…?」

「・・・・・・」

力チツ・・ウイーン・・・カチ。

天使は俺の言葉を聞き流してレコーダーを早送りにして再び再生。

『記憶が・・・・戻つ・・・たら・・・ふふふ・・・』

なんかさつきよりも寝言がはつきりしている気が。

『新曲・・・作り・・・文化・・・祭・・・路上ライブ・・・・』

それから次々と俺が記憶が戻つたら願望を口走り続けていた。

「・・・・これが岩沢さんが消えない根拠か」

「ええ・・・・・」

・・・なるほど、クールな表向きとは裏腹に心の内は願望だらけっ

て事か。

意外な一面を知った気がする。

「ちゃんとそのデータは消しておけよ?」

「今消したわ・・・」

グシャ、立華はHJCレコーダーをHand Sonicで切り裂いた。

・・・・そつちの滅す（けす）じゃ無いんですが。

「そういうことだから、私はできるだけ一人に協力するつもりよ。・・・・とりあえずこのことはゆりに報告した方が良いのか?」

まあ、まずは岩沢さんに言わないと。

「まあ、困ったときは相談するよ・・・・じゃあ

「・・・・ええ」

俺は天使の部屋を出て行つた。

天使からの事実（後書き）

自分の中では 天使 綾崎 岩沢の関係が成立していると思うのですが、どうでしょうか？

それでは次回をお楽しみに！

懐かしころ（前書き）

「じいかがり」一つの三編へと並んであります。一。
それでせじつや～

懐かしい味

俺が天使、もとい立華の部屋を出た頃にはすでに周りは暗くなっていた。

・・・どうしよう、もう食堂は閉まってる時間だし。
自分の部屋で作るという選択肢はあるが、残念ながら材料がない。
ちなみに材料は食堂に行けば分けてもらうことができる。
だけどさつきも言つた通り食堂始まっている。

「・・・腹減った」

さつきから俺の腹の虫が大暴動を起こしている。

重たい足取りで食堂の横を通つたとき人影を感じた。

「なんだ、岩沢さんか・・・」

「な、なんだって何だ！・・・せっかくラーメンの食券が一枚手に入つたのに」

こここの食堂の人気メニュー「トッパンはカレーとラーメンとハンバーグ定食だ。

特にラーメンは食券自体数が少なく、毎日学生達が殺到するくらいの人気を誇つている。

それが一枚あるつて事は、かなり早い時間に食堂に行つたつて事だ。

「・・・ん？・・・一枚？」

「もしかして待つてた？」

「そ、そんな分けないだろう！・・・た、ただラーメンが好きな奴がお前くらいだけだつたから・・・」

あれ？前ひさ子が「食堂のラーメン食べてええええ！」つて騒いでいた気がするんだけど・・・。

「・・・じゃあ、今から食うか？」

「・・・え？」

そう、確かに食堂は閉まっているが”厨房はまだ使用可能だ”。

こここの食堂の厨房は食堂に行けなかつた生徒のために厨房を開放し

ている。

しかし食堂は結構な時間開いているし、作るのは面倒だからとついで厨房を使う生徒は聞いたことがない。

「岩沢さんの作ったラーメン、久しぶりに食べたくなってきた」
岩沢さんは生前ラーメン屋でバイトをしながら音楽活動をやりくりしていた。

そのせいか岩沢さんの中華料理の腕は結構なものだ。
「そ、そう・・・か? し、仕方ないな・・・じゃ、じゃあ、作つてやるよ」

とこうわけで俺と岩沢さんは厨房に向かった。

予想通り厨房に人の姿はない、静まりかえっていた。
「手早く作っちゃうから綾崎はその辺で待つて」

「じゃあ、チャーシュー麺大盛りで」

「・・・分かつてるよ」

ちなみに俺の生前の昼食はもつぱん岩沢さんの働いてる店のラーメンだった。

バターの溶けたスープと麺が絡まって絶妙なうまさなんだな。
・・・やばい、そんなこと考えたらまた腹の虫が・・・。
ぐ〜・・・。
「はは、綾崎はだいぶ腹が減ってるんだな」
ぐ〜・・・。

・・・今のは俺じゃないぞ。

「岩沢さんもね」

「う、うるさい!」

やつぱり待つてたんだな。

よし、明日は一緒に食堂に行くとするか。

「はい、チャーシュー大盛りお待ちがります」

厨房の隅っこにテーブルで待っていた俺の前に見慣れたラーメンが置かれた。

ちなみに岩沢さんは塩ラーメンのチャーシュー抜きだった。

・・・ そういえばチャーシューは苦手なんだつけ。

岩沢さん曰く油がのつた肉を食べるとその後の飯がまずくなるらしい。

「じゃあ、早速いただきます！」

「どうぞ、召し上がり」

ます一口スープを飲んでから麺をする。

ズルズルズル～・・・

・・・ うん、やっぱり美味しいな。岩沢さんのラーメンは

「そうか・・・ よかつた・・・

ズルズル～・・・

岩沢さんもラーメンを食べ始めた。

・・・ その後俺たちは完食するまで無言で食べ続けた。

「ふは～・・・ ごちそうさま～」

「お粗末様でした」

やつぱり美味しいな、岩沢さんのラーメン・・・

俺はスープまで残さずしつかりと食べきった。

本当は身体に悪いからスープまで飲まない方が良いんだけどね。

・・・ そういえば、なんで綾崎は食堂の時間に遅れたんだ？

ああ、そうだ、俺もそのことで岩沢さんに言わないと行けないと
があつたんだつけ・・・。

「実は俺、天使に部屋に来るよつに言われてたんだ」

「・・・え？」

「俺も最初は警戒したよ、そのまま消されるんじゃないかつてね」「…………天使は何でお前を呼び出したんだ？」

「…………それは…………」

俺は、先ほど天使に言われたことの大体のことを話した。さすがに天使が盗聴をしていることは話せなかつたけど……。

「…………とまあ、こんなトコだ」

「…………そんなことが…………」

岩沢さんは最初はとまどつていたが、俺がまじめに話していくことを感じたのか最後まで真剣に聞いてくれた。

「やつぱりゆりに話した方が良いかな？」

ゆりは俺たち戦線のリーダーだ。メンバーである俺が勝手に行動したら戦線が混乱をする可能性がある。

だけどゆりなら上手く戦線をまとめ上げてくれるだろう。まあ、ゆりがこのことを信じてくれたら……だけど

「その方が良いんじやない?」

「…………分かった」

「それよりもだ……」

「…………?」

岩沢さんはいつの間にか周囲に黒いオーラを発していた。

え？…………何？…………俺何かした？

「天使…………いや、立華さんのお部屋にいたんだよな？…………二
人つきりで”」

「…………い、いやいや…………確かにお茶煎れてもらつたり、なぜか隣に座つてきたりしたけど、特にやましいことは何もしていないぞ！？」

ああ…………俺の馬鹿…………思いつきりやましい」とした奴のセリフじやねーか……。

「へ～…………それはさぞかし楽しい時間だつたろうな…………」

いやいや、楽しいも何もあんな緊迫した空間初めて経験したぞ。

「…………どうせ私は生徒会長みたいにかわいくないし、大勢から

慕われるような人間じゃないよ……綾崎もどうせ生徒会長みたいな女の子が好みなんだろう?」

「ちょっと待つた。別に俺は立華みたいな女子がタイプなんて一言も言つてないぞ!？」

「うん言つてない。絶対に言つてないはずだ。

「じゃあ、お前はどんな女が好きなんだ? ひた子か? 関根か? 入江か? ゆりか? ユイか? 遊佐か?」

(ああ、もうこんな時間か。じゃあ、俺は帰るぜ立華?)

(……それじゃあ一つだけ注意しても良いかしら?)

(……なんだ?)

(あなた……岩沢さんのこと、好きでしょ?)

(な……?)

(好きでしょ?)

(……なぜそう思う?)

(あなたが岩沢さんに対してずいぶんと熱心だからよ……嫉妬してしまうくらいに)

(ん? 最後なんて言つた?)

(……何でもないわ、それよりもあなたが岩沢さんのことを好きだつたとしたら……)

(好きだったとしたら何だよ……)

(あなたから告白しては黙田よ、あなたと岩沢さんが連れてしまつかもしれないから)

(……分かつたよ)

……こんなの事が帰り際にあった。

(あなた、岩沢さんの事が好きなんでしょう?)

分からなによ……そんなこと……。

・・・・だつて、生前の岩沢さんは俺にとつてそんな存在だったのが完全には思い出せていないのだから。

思い出の部分は思い出すことができても、革新的な部分は未だに思い出せていない。

生前の俺はこの子をどう思つていたのか。

「綾崎・・・やっぱり私のような女らしくないのは好きじゃないのか？」

「・・・・そんなところは関係ないよ」

「じゃあ・・・どなんのが好きなんだ？」

「俺は・・・」

俺が好きなのは、真っ直ぐで純粹な眼を持つている人だ。

一つのことに対する熱心に打ち込んで、誰からも相手にされなくても気にしない強さを持っている人。

周りからの圧力にも屈しない心を持っている人。

音楽が好きで倒れるまで夢中になつたことがある岩沢さん。

生前一人で誰にも相手にされなくとも歌い続けた岩沢さん。

親から大切なギターをたたき壊されてもそれに屈しなかつた岩沢さん。

・・・ああ、そうか・・・・。

俺って、岩沢さんのことが好きなのか・・・。

（あなたから告白しては駄目よ、あなたと岩沢さんが消えてしまふかもしれないか）

確かにこのまま消えてしまつては俺はずつと後悔するはず。

この世界を変えることができる可能性があるならそれに賭けても良いんじゃないかな？

「俺は、真っ直ぐで、強い眼を持った奴が好きなんだ」

「・・・そう・・・か・・・」

「ああ・・・・」

それきり俺たちは一切話さずに後片付けをして、それぞれの部屋に戻つていった。

懐かしい味（後書き）

自分の気持ちを上手く伝えられない岩沢さん。
自分の気持ちを伝えたいが伝えることを許されない紅騎。
二人の気持ちを知ることが許される日はいつなのか。
次回をお楽しみに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2829y/>

暗闇からのキボウの歌

2011年12月20日22時57分発行